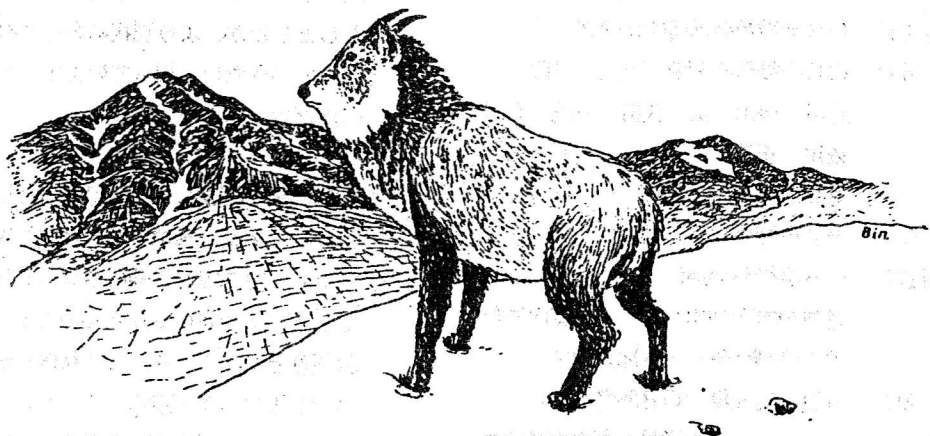


やまぎと

会報 4 号 (' 9 5 冬号)



金沢大学ワンダーフォーゲル部・OB会

OB会会長の挨拶

13期 大島 良治

会員の皆様、お元気でお過ごしでしょうか。
金沢の今頃の天候は例年と同じ、どんよりした曇空の日が続き、今年は雪が早く降るような感じがします。

去る9月23、24日に山小屋ベルクハイムにて「月見の宴」なるものを催し、38名のOBの出席をいただきました。今回の催しは、昭和45年5月に事故で亡くなった、徳島県出身の桂君の冥福を祈って造った「愁心」碑を補修することも目的でした。私は都合により参加出来ませんでしたが、後日写真を見せてもらおうと、素晴らしい出来映えでした。参加したOB、現役諸氏の労力、そして設計者の辰野君に対して、感謝の念を抱かずにおれません。

ベルクハイムも改修が完了し、桂君の碑も新しくなり、後輩達が先輩の足跡を大切に、確実に守っているという実感を今年の秋は持ちました。

唯、今回の行事で感じましたことは、OB会の催しに対しては、現役諸君は大変な労力を強いられます。なにせ、現役40名強に対し、OBは500名強の大世帯なのです。以降のOB会の催しに関しては、出来るだけOB会員で計画、実行をするという姿勢が必要かと考えております。皆様40周年総会にて、御一考下さるようお願いいたします。

このOB会を支えている役員・事務局の方々に感謝するとともに、皆様にも今まで以上に、OB会への御協力をお願いして筆を置きます。

OB会役員会の活動経過

とOB関係情報

(井は日時の確定していないもの)

- 8月3日 会報3号製本完了
井 会報発送 (中川)
- 8月12日 15期横井氏 木曾川で水死
- 19、20日 24期同期会 (青木湖)
井 月見の宴返信集計 (鳥越)
井 月見の宴企画立案 (桐)
- 9月1日 OB会役員会通信N016発送
6日 OB会役員会開催 (上馬 舟田
北川 椿川 梅 久富 鳥越 石川
佐川 正善)
月見の宴打ち合わせ
井 愁心碑補修立案 (辰野)
- 9月17日 OB会役員会通信N017発送
月見の宴参加申し込み者に案内送付
愁心碑補修班への参加依頼を同封
- 23、24日 月見の宴開催 (OB38名参加)
- 10月12日 月見の宴 写真送付と葉書感想依頼
- 10月25日 月見の宴反省会・現役3回生との懇親会
- 11月1日 OB会役員会通信N018送付
- 11、12日 15期同期会 (穴水)
井 名簿改訂、ラベル作成 (名倉)
井 会計報告・発送人ラベル作成 (鳥越)
井 一言通信はがき作成 (坂尻)
井 会報印刷 (中川)
- 12月井 会報発送 (椿川、久富)

一言通信はがきへの お願い

*住所確認のためにも必ずご返送下さい。

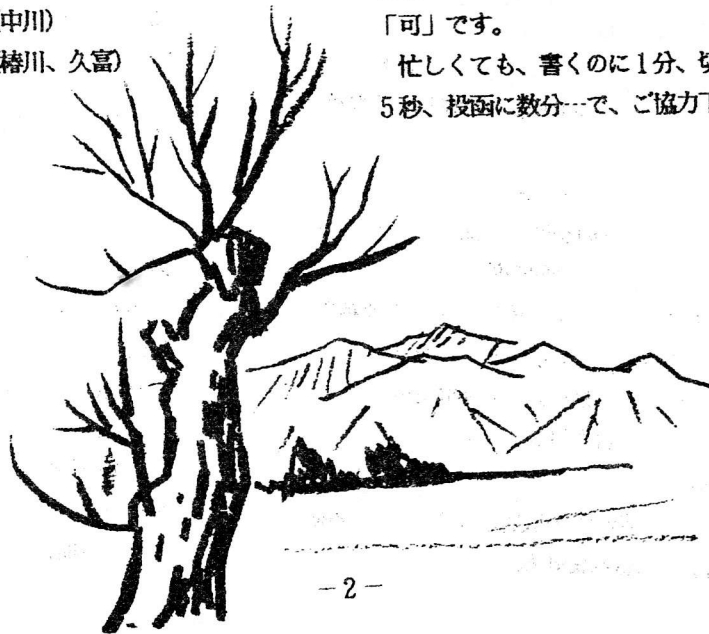
*通信欄には、近況報告、感想、提言などを
お願いします。

役員会ではそろそろ40周年にむけての準備を
始めます。35周年の時は従来どおりの白山登山
としましたが、より現状にあった内容と体制を
考えていきたいと思っています。そのヒントも
いただけたらと思います。

前回、私信としての使用厳禁としましたが…
あれは、実は、鳥越氏が受け取り人となっている
ため、彼の周辺の期に目立ってしまった現象
でした。人望篤いトリさんのこと、つい個人的
お便りとなってしまって「私信だから、載せない
で」といった程度のことでした。が、会報の
上では、「月見の宴への参加×、白紙」が続く
ことになってしまいました。

これではOB会を否定しているようにも受け
取られかねない。半端な注意では、トリさんの
人望にまたも圧倒されかねない…とキツク忠告
させていただいたものです。私信でも、会報に
掲載して皆さんもほのぼのと楽しいものなら、
「可」です。

忙しくても、書くのに1分、切手を貼るのに
5秒、投函に数分…で、ご協力下さい。



書記録訂正の件について

35周年誌の年表について、「事実と違う」「冬のPWがいくつか抜けている」「積雪期とするなら11月後半のアルプスも入るのでは」といった訂正やご意見が寄せられています。

記念誌の年表は、部誌BHの年間行事報告をまとめたものです。それを部室にあるPWインデックス（1PWを1行とし、PW名称と日時のみを記載し、検索できるようにしてあるもの）と照合しました。

BH誌は概ね12月を締め切りとし、編集・校正にあたったことから、年末から年度末までの扱いがバラバラで、この期間が次期に引き継がれず、抜け落ちていることもありました。それは任期変更で、記録のチェック者も年度替わりしてしまうようになってからは、いっそう曖昧になっていったように思われます。

「35周年事後報告書」でお知らせしましたが、前田先生が、顧問就任依頼の計画書を整理し、記念誌のPWと照合して下さいました。しかし、計画書はあくまで計画書であって、実際行われたのか、メンバーやコースにどのような変更があったものかは一切わからない……とのことでした。

その照合で追加になったものについては、35周年総会時に、現役編集委員に頼み、参加しているOBに手分けして訊ねてもらいました。「忘れた」がほとんどでした。

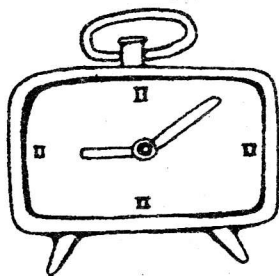
ちなみに、BH15号は、山小屋改築による資金不足で手書き発行となり、行事報告が抜けてしまいました。編集長は当時の4回生でかろうじて当事者のうちというわけで、こ汚いバインダーを持ち帰って調べたのですが……メンバー表のないもの、感想ばかりでコースの記載のないもの、参照された後もとに戻されていないもの……年月が過ぎてから事実を追うことの難しさ、虚しさを思い知るばかりでした。

毎年BHを出すことで、その年度の正確な記録を残して……と切に願います。

部の歴史を正確に、着実に重ねていくためにOB会も、資金援助という応援をしていけたらと思います。

当時のP審議長へは、5W1Hの分かる形式の記録用紙を作り、計画と実行されたものをセットにして保存して……と提言しました。

もろもろの言い訳を並べましたが、40周年誌に、最後の記録訂正を掲載しようと思います。そのあたりを「時効」とさせていただきます。記念誌掲載のPWについての確かな記録、記憶をお持ちの方は、それまでに事務局へ訂正の連絡をお願いします。



「積雪期」の活動についてですが、これは現地に雪があったかどうかではなく、「冬期」の活動という意味で使用しました。

秋休みのPW後、冬眠状態になる部員が多く、冬期にどのような活動を行うか？は部の課題でした。

山岳部的だと反論されつつ雪山が取り組まれたのは、北陸にあっては山が雪山になることは避けられず、四季を通じて自然と向き合う上で雪山も取り組むべき……とされました。仕方なくではなく、多くの部員が白い世界には魅せられていったようです。

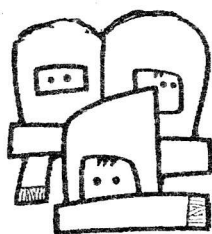
「ワンゲルとは？」にとって、この時期が本音のうかがえる時ではないか？さらに山岳部的に雪山をめざしていくのか、この時期こそロード主体に活動していくのか？ゲレンデスキーから山スキーへといった動きが出てくるのか？……そんな観点から、まとめてみたものです。

雪山にこだわりのあった方には、一つ一つのPWが次の足かりとなって、地域や、山行時期が拡大されていったのであり、冬のPWが抜けていることや、年度区切りにミスがあるらしいことは「仕方がない」ではすまされない問題であろうと思います。

この件については、やはり「こだわり」のある方に、事実を追っていただくしかありません。どの時期にどんな装備が、どんな技術が導入されていったか？興味深いテーマだと思います。今年は5月末に雷鳥沢で、現役が雪上トレを行事として行っており、雪山志向が強まっている印象もあります。

記念誌編集長もかつて雪山に魅せられた一人なのですが、OBになってからは、余りに雪や岩といった先鋭的な山行をする人は、かえって境遇が変わった時山から遠ざかってしまうといった見解を持つようになりました。生涯ワンダラーであるために、活動を柔軟に多様化しているのは歓迎の気持ちで「積雪期」の扱いにも働いてしまったと思います。

「積雪期」について、前述のように部室の資料でまとめることは困難であり、各PWのリーダーに問い合わせることが一番確実なようです。責任転嫁のようですが、もし調査にあたって下さる個人、グループがあれば、編集活動費をまわします。青春の正確な記録を掘り起こしたい方を募集します。



ビーコン及びアマ無線に関して (その2)

「こんな時に言うのも何ですが…」と懇親会の折りに聞きました。

年度はじめの3M会(3年ミーティング)では、ビーコンにせよ、アマ無線にせよ、今の自分達には使いこなせそうもない。もし、それだけの資金があるのなら、プールしておいてもらって、いざという時1回でも多くヘリを飛ばすとか、すぐ使えるお金としておいてあるとありがたい…ということにまとまったのだそうです。それを口下手の佐川が「いらんだろうになりました」しか言わんからに…。と、佐川氏は責めを一手に引き受け、立派に主持職を務めているようでした。

それでもさすがに冬山がせまり、「どうしよう」「今から受けても間に合わんし…」の声も、かすかにはあるよう…。

事故が起きてからより、事故を起こさないように役立ちたいものですが、当人達が希望しないというのなら…。ともあれ正確な返事をお伝えします。

彼等も何か起きれば、まず頼れる所はOB会と考えているそうです。その意味では、OB会がきちんと活動していることが、遭難対策につながることもなのかもしれません。

部誌BHを出すぞ！

33-37号編集長 西馬 由岳 (38期)

この度、部誌BHを発行すべく活動することになりました。今回こそは何としても発行しようと決意しております。さらに、今後年1回の発行を軌道に乗せることももくろんでおります。

とは言ったものの、まだたいした活動はしておらず、この先の計画も立っておりません。どうなるのか不安ではありますが、OBの方々に予告することになってしまいました。

OBの皆さん、我々編集委員も頑張りますので、助言と資金援助をお願いします。なお、広告の掲載も予定しておりますので、もしよろしければ御協力下さい。

それでは皆さん、お楽しみに。



事務局からの補足

昨年も部誌BH発行の話が持ち上がりながら没。今回は先の28-32号が発行されてから5年目ということで、「何としても」と気合が入っている様子です。

部発足の翌年から発行された部誌BHは、昭和61年の27号以後中断。平成3年によくやく28-32号がOB2年の水腰・石倉さんの努力で復刊されたものの、また中断となりました。金大ワンゲルに限らず、機関誌、同人誌といったものは廃刊の傾向にあるようです。

かつて部に歴代のBH誌が並んでいた頃、それを読んで活動の示唆を与えられた人や、部活動への苦悩の答えを求めようとした人もありました。マルチメディアやインターネットの時代であっても、時間・空間を超える活字の魅力は失せるものではありません。

さらに35周年記念誌をまとめた体験からは、年月がたつほど事実は追えなくなるものであり、1年毎の記録の総括を担っていた点でもBH誌は評価できるものでした。

BH誌発刊への資金援助は、第1回の役員会にて承認されています。5年ぶりの発刊となると、記事の中には若手OBも含まれています。また、現役も当然OBになるのであり、彼等の

活動記録がきちんと残るよう援助していくことは、十分OB会の目的にかなうものと思います。

今回は外部発注を行います。次回から本当に毎年の発行とあれば、OB会報のような安価な手段も考えてもらい、その時はその時なりの支援体制をとってみたいと思います。

またBH誌は完成後の会報に同封し、全OBに配布する予定です。現役との交流の企画への参加もなかなか難しいことで、BHを手にしていただくことが確実な交流の手段とも思います。

囲みの中にありますように、広告、編集活動への差し入れもよろしくお願いします。

宛先は 金沢市田井町10-5 田中荘5号

西馬 由岳 0762-23-8201

若手OBの方々へ。今回のBHには皆さんの原稿も載ります。OB会費未納の方は、これを機会に納入をお願いします。一括納入の場合、35期までが1万円。36期は8000円です。

郵便振替口座 00780-3-14120

金沢大学ワンダーフォーゲル部OB会

＊登山道整備補助金のこと

月見の宴の直後に、ナカオ山岳会の林代表から聞きました。「登山道の修復に動いているような団体があれば、補助金を出してやるように」という声が、金沢市長から、農林関係の部署にかかり、そこから林さんに問い合わせが入ったそうです。林さんとしては、医王山のナカオ新道以外に手を広げる気はなく、もし金大ワングルが高三郎の道に取り組むつもりがあれば、そのように図ってやってもよいが…ということでした。

懇親会の席で現役3回生に聞いてみたところ、彼等は大乗気で、

「部も個人も万年金欠で、是非お願いしたい」とのことでした。

その際同席していた上馬さんと梅さんからは「あそこは国有林であり、さらに自然環境特別保全地区で、本来は一本一草たりとも手を加えてはいけないことになっている。そのあたりを行政サイドで解決しておいてもらった上での話なら…」との懸念が出されました。

林さんにはその懸念を伝えた上で、話を進めていただけるようお願いしました。書類の上ではどうしていけばいいのか？林さんのアドバイ

スをいただき、前田顧問にもご相談して、進めてみたいと思っています。

そうやって高三郎の登山道整備が進んでくれれば幸いです。

今でも、高三郎は金大ワングルの山であるということは、石川県の山屋なら知っています。

「おらが山」といえる山があること、先輩・後輩が等しく懐かしく思える山があることは有りがたいことだと思うのですが…。

月見の宴の感想に添えて、次のような提言がありました。

「前回ベルクハイムに行って感じた事ですが、現役部員はさほどベルクハイム自体には愛着を持っていないように思われました。でも、もっと使って欲しいと思うのは私だけでしょうか。

そんなことから提案したいのですが、OB会の有志による山小屋作業はいかがでしょうか。金沢近辺に在住するOBの有志が、適当に日と作業内容を決めて1泊して作業を行うという方式です。

私も含め、山には行きたいけれど、体力と時間がとれないという連中がほとんどだと思います。でも自分の愛したベルクハイムのために、2日間を作って集まるというのもよいのではないのでしょうか。

来春あたり一度計画してみませんか。」

私自身も地元OBは飲み会へと日和るのではなく、小屋作業でつながっていけたらと思っています。そんなまとまりがあれば、万一の遭難時も、ましな対応ができるのではとも思います。40周年にはワングル平の看板を立て直したい…も、夢なのです。



(今年の3回生は38期。高三郎での新トレが再開された時には1回生で、その時は引火事故で山行は中止になりました。35周年を1回生の夏に体験しました。城内キャンパスで4カ月を過ごし、あの長屋部室を知る最後の代です。男子ばかりの13名。当日は哀れ追試の餌食になった人達を除く9名が参加しました。)

□新入生勧誘について—看板を立ててもいいのは文化系サークルだけ。運動系はどこも看板禁止になっている。

新入生を飲ませるのがボッカトレの後。あれで呆れられて、辞めていくのが何人かいる。

「マネージャーならいいですけど、部員になるのは…」と辞めていった女の子もいたぞ。

□角間キャンパスに移ってから、部室に寄ることが少なくなった。以前は、授業が抜けた時には行って昔の記録を広げて読んでみたり、帰りがけには必ず寄ってみたりしたものだったが、今は行かない。場所的に離れていて不便。寝られるような雰囲気もないし。山行の行き帰りも不便。利用できるバスがない。

□今年の秋休みはPWが1個。

(PW審議長がPWを増やすよう努力しますと紹介の時も言っていました。)

それは—学部ごとに休みがずれて出しにくいの？

個人山行を認めたことが第一の原因。3回生くらいになると、結構2人用なんかのテントを持っていて、自分達で行こうとあっさり話がまとまってしまう。PWにすると手続きが面倒。まず学生部に行ってアボを取って来る。その日に見てくれる訳ではなく、指定された日にもう1回行って説明して、何か言われたことをもう1度P審にかけて、となると3週間はかかってしまう。ああ、面倒！で個人山行に流れてしまう。

でもそれはチェックがなくなり、隠れ山行になっていって、かえって危険を増やしていることにならんかね

マズイと思っています。PWは1個しか出なかったし、結果的に1年生が山へ行けなかった。

(昔PWは公募が義務づけられていたように思いますし、自分でPWを出すことは夢でもありました。善処を望みたいところです。)

□車使用の件—走行距離につきいくらか、運転者の負担を減らすとか、車使用を強制されないなどの運営規約は決めている。しかし本当に事故を起こしてしまった時にはどうなるか、自分達にも見当がつかない。しかしアプローチが略段に楽になり、ワンデイハイクの範囲が広げられ、車志向は避けられない。ともかく、助手席の奴が声をかけたり、休憩をとって帰路には気をつけるようにしている。

□「大名食当」というのは知らないが「1年生の日」というのがあって、山の最後の日には1年生を仕事から解放している。合宿の時、自分のパーティーでは仕事が一巡した後は、毎日ボーカーで分担を決めていた。パーティー単位が小さいこともあり、一緒に仕事をしている。

□歓送コンパは今は施設(安い旅館、国民宿舎)で泊まりこみでやる。それは4回生の主催で、どこでやるかはギリギリまで秘密。金かかるだろうな。俺達の代はたくさんいるから一人当たりが減って助かるけどなあ。

□新トレの後は小屋作業まで誰も小屋へは入らない。小屋作業の下見に数名が入る程度。出島からの草刈ですか？あれはキノコ取りなんか刈って行くらしくて、僕らが下見に行った時はまだボウボウ。どうする？これも懐かしい自然や、そのままにしておこうといったら、本番の時にはもう刈ってあって。ええ、去年なんかもそうでした。



OBの方からは、

月見の宴の後の白山で、現役と院生OBに声をかけられ、ずっと話しながら歩いて楽しかった。気軽に声をかけて欲しい。その方がOBも嬉しい。なかなか全員の顔を覚えられもしないので、山へ入る時にザックにつけられるようなワッペンかなんか、金大ワングル関係と分かるものがあるといいと思う。結構年功序列の残る部だが、卒業すればそんな構えを外して、同じOBとして気軽に交流できる仲間になっていきたい。

の提言や

就職するにあたり、公務員としての心得を聞かせてほしいとの電話をもらい会ってきました…との交流も報告されました。

という次第でお酒も次々追加、楽しい一時が過ごせました。山の無事をお祈りし、近い将来OB会員として歓迎する旨お伝えして、お開きとしました。

③酒、ワッペンの件、傷害保険の保険証を兼ねれば、必携してもらえるのではと思います。損保関係の方、このアイデア買いませんか?)



参加予定者からの通信

*仙田 厚太郎 1期

何時もながら、色々お世話していただき本当にありがとうございます。

久しぶりに多くの人達と会えるのを楽しみにしています。

*田村 昭夫 3期

当日、「白山いくたび」と題する、元金大学長金子曾政先生の詩を持参いたします。作曲に心得のあるOB、現役で、この詩に曲をつけて部歌としたら如何でしょうか。

*小林 宜泰 3期

倉谷で砂金とりをしたいものです。

*村田 泰恵 7期

20年ぶりに日の目を見た登山靴。雪溶け水の中でもしっかりと防水が効きました。6月には雨飾山、8月には八ヶ岳、天狗岳—横岳—赤岳と6期の上野先輩としっかり縦走して来ました。これならまだまだ頑張れそうです。中高音バワ—全開と云ったところです。

*穴田 昭一 8期

学校登山で中学生達と8月2日、3日と白山に行ってきました。その前後はずっと晴天だったのに、2日、3日は雨とガスと風…。しかし、ワングル1年生(昭和38)より白山へ登り始めて、今夏のお花畑は最高。OB会月見の宴、お世話、ご苦労様です。楽しみにしております。

*平村 耕作 9期

月見の宴の準備ご苦労様。やまざと3号楽しく読まさせていただきました。倉谷へ入るのは何十年ぶりでしょう。楽しみにしています。

*吉田 幸造 9期

よろしくお願いします。今夏は白馬三山へ登りましたが、ガスと雨で散々でした。ゴアテックスとかいう立派なものを買いました。もうポンチョの時代は通り過ぎたのでしょうか。シュラフは処分してありませんので、シュラフ借ります。穴田さんに会えるのを楽しみにしています。

*小山 清 11期

いろいろとお世話御苦勞様です。11期守内氏自宅電話番号変更です。9期長谷川和代さん、立山室堂で自然解説員のボランティアをしております。



*吉本 良治 13期

準備etc. お手伝い出来ることがあればお知らせ下さい。(返事が遅れて申し訳ありません。)

*吉田 穂積 13期

御苦勞様です。ありがとう。「やまざと」興味深く読ませて頂きました。

*辰野 隆義 13期

ベルクハイムでの1泊を楽しみにしています。

*柴田 茂樹・訓子 13期

この度のことでは(編者注; 15期横井さんの水死事故)言葉を失っています。昨年12月14日東京よみうりホールでお会ったのが最後になってしまいました。お通夜にて、お母様、お兄様にお会いしました。奥様のこれからを想う時、胸がつまります。お力になれることがありましたら――。

9月25日(月)富山事務局にて講師依頼があり、月見の宴の続きで、そちらへ向かう計画を立てています。

*清家 雅幸 14期

大変遅れて申し訳ありませんが、是非参加させて下さい。Bergheimでの皆さんとの語らいを楽しみにしています。

*上馬 康生 15期

OB会役員会の皆さん、いつもご苦勞様です。少しくらいはお手伝いできますので、また声をかけて下さい。家族4人で鳥海山へ登ってきました。

*坂尻 忠秀 15期

なつかしい倉谷の月を見るのは何年ぶりのことになりましょうか。川音と、トラツグミの鳴き声になかなか寝つけなかったことを思い出します。

執行部の一員におりながら、能登に引っ込んでからは協力も十分にできずにおり、皆様にご迷惑をかけていることをお詫び申し上げます。会報の中では寺崎さんの手記には、心打たれるものがありました。山に限らず、普段の行動や身の処し方などにも、合い通じる面があり感銘を受けました。よくこれだけの手記を書いていただけたものと感心します。

盆明けより約5週間、茨城県つくば市へ出張することになっています。したがって、月見の宴の事前準備などには何も働けそうにないのでご了承をお願いします。

*松林 知一 15期

こんなことでもなければ、もうBHを訪ねることもなくなりました。忙しいからこそ、私生活を大事にし、今を精一杯に生きていくことの大切さを痛感しているところです。合掌。
お世話ご苦勞様です。よろしくお願いします。

*佐野 哲雄 15期

OB会名簿には必要ないかもしれませんが、帰省先の住所、電話番号も、同期の名簿には必要なことが良く分かりました。

(同期横井君の水難事故に際して)

*舟田 節子 15期

梅雨明けしてから登った山―妙法山(ついに三男坊に抜かれる)、白山・別山(指導者仲間を白山引き回しの刑に処す)、剣岳(夫婦で早月

尾根コース)、立山(大分からの弟一家と。甥っ子と雪遊び)、木曾駒(一の予定)。まずは快調に夏山を楽しんでいます。別山の頂上では、5月に高三郎の頂上で会った人とバッテリー…びっくりした後ニンマリ。中高年の山中毒多し。そして、チブリ尾根では、合宿トレ中のKUWVともすれ違う…若い汗ってやっぱりいい!

*北川 隆次 16期

(次の便) 仕事の都合がつかせませんでした。欠席させて下さい。

*横井 恒雄 18期

毎々連絡が遅れて申し訳ありません。



*椿川 利弘 18期

8月初旬に家族で白山に行ってきました。今年は7月の多雨と低温で花期がずれ、ことのほかきれいな花を見ることができました。

*岡部 伸一 18期

仕事の都合上、土曜日は休めないと思いますが、変更出来れば出席したいと思います。

(次の便)

たいへん残念ですが、やはり休日がとれません。参加の皆さんによりしくお伝え下さい。

*久富 象二 20期

お手配ご苦労様です。

*広田 秀和 25期

おひさしぶりです。丁度夏休みに「やまざと」が届きました。

*渋谷 敏行 29期

お返事が遅くなってしまいましたが、よろしくお願いいたします。

*北村 智明・高木 美保 29期

いつもご苦労様です。返送遅れてすみません。できるだけ参加する予定ですが、子供の様子等をみながらということでお願いします。(子供はシュラフ&テントが苦手らしい…8ヶ月の去年は平気で寝たのに、1年8ヶ月の今年は怖がってぐずりっぱなしでした。)

*野田 和裕 30期

(電話で)

祖父危篤の報が入り、参加できなくなりました。

*石倉 昭彦 31期

よろしくお願いします。

*奥出 俊一 33期

入院(40日)、引越、就職とバタバタしてしまい、連絡員としてお役にたてず、すみません。9ヶ月間、膝にボルトが入っていた(どこかで聞いたような…)のが、やっと取れ、これから快気祝いに水晶、赤牛岳へ行こう、という朝にこのハガキを投函。

*金田 学 34期

8月のお盆に帰省してようやくこの企画のことを知りました。今年から働き始めたもので、はっきりと行けるかどうかはわかりませんが、気持ちちは参加したいと思っています。また連絡します。

(電話…仕事の都合がつかず欠席)

*奥 民昭 34期

1ヶ月先のスケジュールも分からね仕事ですが、参加したいと思っています。よろしくお願いします。

(次の便)

すいません。仕事の都合で不参加になりました。せっかく手配して下さったのに申し訳ありません。お氣をつけて行ってきて下さい。

不参加者からの通信

*佐古 文男 2期

お世話になっております。9月には帰省しますので、参加できそうもありません。

*西尾 皓史 3期

50才を過ぎましたが、元気一杯です。年1回の白山登山で自分の体力を測定しております。土日はなかなか自分の時間がとれません。参加できないのが残念です。

*岩井 修 3期

5月の連休に島根県境の安蔵寺山に登りました。男3人、女4人（すべてオジンとオバン）。俺はベテラン、誰かが先にバテルだろう…。てな調子で行きましたが、1番先に足に来たのは最年長の僕。半分はバックで山を下りました。ヤレヤレ！！
S37年工学部工化のクラス会が9/16、17。リストラの大人事移動が10/1。定年延長の身でも、あまり遊んでいては首かやバイのです。残念ながら参加出来ません。

*登内 郁夫 3期

なつかしく会報拝見いたしました。今回は参加できませんが、次回とは考えております。一部室はどうになりましたか？新しいキャンパスに移りましたでしょうか？皆様のご健勝をお祈り申し上げます。

*森島 稔 4期

9/19-23 まで出張（札幌他）のため残念ながら参加できません。

「やまざと」3号p.49の東海ワンゲル会不参加の説明に記した異動は、結果として続投となりました。なお忙しく、やっています。皆さんによりしく。

*亀田 武 5期

サラリーマン生活30年超、すっかり自然とのふ

れあいの少なくなったことから、1度は参加したいと思いつつも、他のスケジュールとバッティングしているため残念だが…。参加のOB各位にぜひよろしくお伝えを。

*山田 允 5期

楽しい宴となりますことを祈っております。

*金岩 孜 5期

今年は仕事も変わり、心機一転チャレンジ中です。なかなか山行きもできず、せいぜいテニスでお茶を濁す程度。皆さんのご健勝をお祈り致します。

*稲葉 正己 5期

役員の皆様の大変なご苦勞に感謝致しております。近くに居ながら、自らの理由でOB会の活動にご協力せず申し訳なく存じています。月見の宴のご盛会をお祈りしています。

*小松 武文 6期

会報やまざと3号送付有り難うございました。懐かしく読ませて頂きました。月見の宴は都合悪く、参加できません。残念です。山登りは今でも年に1、2度は家族で楽しく登っています。

*大崎 進 6期

月に1度は出張するので、うまくいけばと思ったのですが、残念でした。出張帰りに時々（自分にとって）未知の山へ登ります。いつも単独行なので、観光ルートのみです。今春は金峰山で、いくつかの大学のワンゲルと出会い、昔の光景を思い出しました。

*石橋 毅 6期

「やまざと」ありがとうございます。今夏は1ヶ月ほどタイ北部に調査に行ってきた。日本の夏の方が暑い様に感じます。Bergheimも1度、訪れたいと思っていますが、実現しません。きっとそのうち…。



*合津 尚 6期

BHの修復がうれしい。参加したいけど、都合がつかねそうです。

今年は2回のフルマラソンにチャレンジ（アンダー4時間）

*清野 邦弘 6期

月見の宴とは、優雅な人種になりました。自身の体型を見返して、猩々寺の狸囃子の「挿絵」を思い出しました。

*大磯 岩雄 7期

BHの修復、うれしく思います。関係された方々、ほんとうに御苦労さまでした。

*富永 浩之 7期

今回の兵庫県南東部地震で、神戸市中央区のマンションは復興関係の人に貸し、私は下記へ引っ越しました。現住所の変更をお願いします。全員元気で過ごしております。皆様のご健勝をお祈りしております。

*飯田 利之 7期

ご心配をお掛け致して申し訳ありません。家族全員無事です。震度7で廻りがほとんど全壊した中で、家は比較的新しいせいか（築後17年）住める状態です。（外観は異状なし）

*中山 美津枝 7期

やまざと楽しく読ませてもらいました。今は、主人と二人、無理をしないで近場の山へ登っています。今年は忙しくて、夏の白山に2回登ったきり。秋を待っています。

*沢田 孝雄 7期

7期幹事の村田女史より、会費未納についてお叱りをうけ、同席者のうち未納者は帰宅後直ちに送金することになりました。遅れましたこと、お詫びします。

やまざと、ありがとうございました。

*篠島 益夫 8期

昨年12月より異動で広島へ単身勤務です。中国山地、西中国山地（いずれも国定公園）にも素晴らしい山や峡谷があることが、歩いて判りました。明日は娘達を連れて、西中国山地の三段峡から恐羅漢山（オソラカンザン）を歩きます。会社行事の関係で残念ながら不参加となりました。

*鍋島 武 9期

・ちょっと出稼ぎのつもりが、居心地の良さで東京28年目。

・戦後50年とともに、我輩も50才。

・KUWV OB会報に刺激されて、小生も再スタート宣言。

*伊藤 博道 9期

「やまざと」3号ご送付いただきありがとうございますございました。

月見の宴は都合で参加できませんが、ご盛会を祈っております。

*清水 一 9期

「やまざと」の送付ありがとうございます。楽しく読ませていただいています。

本年も山へ行けず…。元気にやっています。

*白井 勇 9期

楽しみにしていましたが、先日、中部経済連合会出向を解かれ、本店へ戻りました。予定がたちませんので、申し訳ございませんが、欠席させていただきます。

*寺本 典生 10期

教員採用試験事務の最終段階で、休日出勤予定のため、残念ながら参加できません。

8月初め、ふとしたことからブナオ峠が車で越えられることを知り（遅れてますが…）、30年ぶりで不動滝と対面してきました。

*芝田 真 11期 照美 12期

勤務先が諏訪精工舎となっていたら、セイコーエプソンに直しておいて下さい。

そろそろ名簿に電子メールアドレスを記入する時代かも。

*森川 功 11期

5月末より木更津で独身生活を送っています。千葉県に住んでみると、高い山と雪の風景が懐かしくなります。

*山口 裕 11期

最近、月1回のペースで山歩きを始めました。現役の皆様は学生時代を大いに楽しんで下さい。

*杉森 和義 11期

返事が遅れて申し訳ありません。先日「東海ワングル会」に出席し、多数のOBがいまだ「現役」で楽しんでいることを聞くと、ゼネコン（熊谷組）勤務の私としては、<もっと自然を大切にしなければ>と自己嫌悪に落ち込んでいます。



*北川 邦夫 11期

BH修復おめでとうございます。卒業以来25年、一度は倉谷へ行ってみたいと思っています。

*守内 成一 11期

お陰様で家族全員無事に過ごしております。OB会、頑張ってみえますのはよくわかりますが、過ぎて疲れられません様に。

10年位先に、普通に活動が続いていると楽しいですね。いずれにしても御苦労様です。

*小西 外士郎 12期

白神山系、十和田高原と、日本有数の大自然に囲まれた生活を始めて1年になります。山野草に親しむ生活に変わりつつあります。

*岩田 実 13期

先日東海ワングル会にて懐かしき山々をスライドで見、感慨を深くしました。

今回は参加できませんが、またの機会を楽しみにしています。

*橋正 徹 13期

山は遠方より眺める存在となりましたが、それでも<無関係>にはできない存在です。立山にしろ、乗鞍にしろ、富士山の5合目にしろ、上高地にしろ、心を引きつけるものがあります。三角点を有する郷土の低山もまた同様です。

*浅見 裕子 14期

いつも連絡有り難うございます。我が14期生は金沢在住の方がいないせいもあり、なかなか一同に会する機会がとれません。東京や大阪などで、一部の者が集まり飲み会などやっているようなのですが…。皆、元気でやっています。

*仁藤 早苗 14期

やまざとを読ませてもらっていると、皆様の元気のよさが伝わってきます。こちらも今、学園生の食事作りをさせてもらっているの、夏休み中、行事も入って大忙しです。霧がはれると毎日斜里岳の山々が美しく見えるところです。

*鈴木 良紀 15期

新トレで、石を担いで歩き登った記憶も、うすれていっています。

*山田 容子 16期

会報3号、読ませていただきました。もう卒業して20年たってしまったのかと、年月の過ぎる早さをしみじみ感じています。とても懐かしく思います。

*金森 広 16期

神戸から東京に移って1年半となります。大震災には会わなかったものの、あの美しい神戸の街が…と、心を痛めていました。1日でも早く

の復興を願っています。兵庫地区OBによろしくお伝え下さい。

*中野 淳一 16期

倉谷、BH、高三郎…懐かしい思い出が蘇ります。そうそう、あのカメ虫の味も忘れられませんが、都合で参加できませんが、宴の大成功を祈ります。

*清水 重仁 16期

会社の旅行に重なってしまい、残念ながら参加できません。皆さんによろしく。

*渡辺 和文 17期

好天に恵まれますよう、お祈り申し上げます。

*小島 敬・幸子 17期

7月1日は、遠路はるばるご苦労様でした。月見の宴の成功を祈念しています。



*柳座 久子 17期

「やまざと」NO3楽しみに読ませていただきました。この夏、中3の息子が友人二人と大雨の中、大日岳へ登り心配しました。寺崎さんの遭難記録はタイムリーで、身にせまるものがありました。貴重な体験記をありがとうございます。

*藤森 忠夫 18期

参加しなかったのですが、運動会があって、残念ながら参加できません。又の機会を楽しみにしています。

*佐藤 喜代美 18期

毎回盛り沢山の情報が載せられた「やまざと」を送って下さり、感謝致します。今は、全く山から離れていますが、「遠山郷の御案内」を読み、行ってみたいくなりました。

*帯刀 圭子 19期

職場から高三郎や大門がよく見えます。会報3号ありがとうございます。椿川さんの記事は

なつかしく、新トレを思い出しました。子供が一緒に行ってくれるようになったら、また白山に行きたいと思っています。

*岡崎 秀二 21期

参加したい気はありますが、中国滞在期間のため、無理です。

役員の皆さん、本当に御苦労様です。

*竹中 敏 21期

夏、リゾート気分の人達が、都会からドッとやってきます。でも、何かものたりなさを感じます。日本海側生まれの私は、やっぱり、ブナ林が広がり、冬には、たっぷり雪の降る所が好きです。

*竹内 和彦 21期

当日は残念ながら、顧問をしているバド部の試合があり、参加できません。BHの修復御苦労様でした。&皆さん方の再会を楽しんで下さい。またの機会に。

*斉藤 剛 22期

平均2年に1度転勤しており、OB会の方々へはご迷惑をお掛けしています。

子供がもう少し大きくなったら、山行を再開する予定です。OB会役員の方々は大変と思いますが、今後もガンバッテ下さい。よろしく願います。

*安達 敦子 22期

金沢在住のOBの方々の御苦労を思いながら、拜読させていただいております。

駒帰からダムまでの林道で、ほんのり匂っていたうす紅の花。タニウツギと新トレの時に教えてもらいました。

*黒崎 敏男 22期

今回は残念ながら参加できませんが、べつの機会(行事)には是非参加したく思っています。月見の宴の成功をお祈りいたします。

*森 恵利子 22期

23-24日に先に予定が入っていました。残念ながら欠席します。

*高橋 智恵子 23期

遅れてしまい申し訳ございません。今年の夏、何年かぶりにバテバテになりながら槍・穂に登りました。今回は残念ながら参加できませんが、次回に備えることにします。

*窪川 淳一 23期

山行からも遠ざかっていましたが、昨年より、上の娘と夏の白山に登っています。近い将来、家族5人で山を楽しめる様になれば、と思っています。

*宮西 康之 23期

会報3号、楽しく読ませていただきました。月見の宴は仕事のため参加できません。
「東海ワングル会」発足おめでとうございます。尚23期には昔から、自称「23期関西支部」があります。

(私の住所は「ラドン」でもなく「ウドン」でもなく「メゾン」です。OB会名簿の訂正をお願いします。)

*興井 隆 23期

参加できなくなり残念です。ところで、今後BHを利用したい時はどうしたらいいんでしょうか…。OBは利用できないんですか？

(編者注；原則として、現役主将にあらかじめご連絡下さい。OBもどんどん利用して下さい。カギの番号は594です。)

*辻 政孝 23期

子供の小学校の運動会があるので欠席させていただきます。

*石地 隆司 23期

トリさん、御苦労さんです。返信遅くなってす

んませんでした。ヨメハン連れて行くつもりでしたが、事情があって行けなくなってしまいました。密かに倉谷でイワナ釣りやってやろうと思っていたのに残念です…。

P.S. 次回の会報楽しみにしてます。

*名倉 均・雅子 23期

予定がたらず、参加は無理のようです。

夏休みに北海道の然別湖で偶然、21期の竹中さんファミリーに出会い、びっくりしました。

*坪井 陽典 24期

ベルクハイムというと、真先に思い出すのが、高桑弘親さん(19期)遭難時に、同行していた辻泰樹さん(19期)が、ベルクハイムにあるノートに書かれた文章です。「非常事態発生か？」(確か)で始まるあの文を読んでなおさら、山での(人為的な)事故だけは避けたいと、強く思うようになったものです。あのノートはまだあるのでしょうか。あれだけ大切に保管しておいてほしいと思っています。

*黒岩 達夫 24期

8/19-20と24期同期会(信州さまあきゅんぶ)を信州青木湖畔で開催し、久しぶりに同期で盛り上がりました。来年も第2回を開くことを約束し、楽しいキャンプを終えました。参加者は下記のとおりです。

坪井、仲村、酒井+Jr、加納夫妻+娘2人、麻田夫妻+息子2人、私、25期の樋口君、の計大人9名小人5名…14名。

*細川 正勝 25期

やまざと届きました。ありがとうございます。

*外村 雅治 26期 美佳 27期

卒業以来訪れたことのない倉谷、BHをなつかしく思い出しています。残念ながら参加はできませんが、伊勢原から月を拝んでおります。今年春に2人目の子供が誕生しました。(上が男。今度は女でした。)しばらくは育児に専念の日々です。いつの日か家族で山登りできる日

を楽しみにしています。

P.S.会報には、いつも元気づけられる思いがします。ありがとうございます。

*山口 雪枝 26期

いつもありがとうございます。7月22日に2人目(女の子)が生まれました。病院の窓から梅雨明けした空と、白山を眺めていました。また当分は子育てに専念です。

*荻生 一美 26期

大変なつかしい場所へのお誘いなのですが、家の都合で行けません。天候に恵まれ、楽しい山行になることをお祈りします。

*島山 潤 26期

長女の出産とともに山行方法も大きく変わりました。来年は家族でのキャンプ、スキー等を計画しています。

*二木 博子 27期

ただいま妊娠6ヶ月。96年1月出産予定のためしばらく山へは行けません。また子供が歩けるようになったら、山で会いましょう。

*中道 正樹 29期

現在、左膝の変形性膝関節症(軽度)と診断され、昔のように元気に山歩きのできない体になってます。皆さんと会えないのが残念です。現役もOBも無理せず山を楽しんで下さい。

*多久 聡美 31期

いつも何のお手伝いもできず、申し訳なく存じております。
盛会をお祈りいたします。

*井村 俊夫 35期

お返事遅くなって申し訳ありません。現在私はまだ就職活動中で、その時期試験等があるかもしれません。ですから今回は残念ながら欠席させていただきます。



寺崎さんからのお便り

(会報3号の毛勝山遭難記の筆者)

拝啓 猛暑の折、お元気でお過ごしのことと思います。本日「やまざと」と「ベルクハイム」をいただきました。

たいへん立派な会報で、興味つきなく読ませていただきました。

この本を私の登山に生かし、山岳遭難警鐘の座右の銘として大切にしたいと思っています。ありがとうございました。

会員の方々にもよろしくお伝え下さい。

敬具

8月5日

寺崎 健二

月見の宴・参加者

マ…マイカー □人乗り

先発隊 (小立野キャンパス午前9時発)

13期 辰野 隆義 マ7 13期 吉田 穂積 マ7 13期 吉本 良治 マ4
 13期 柴田 茂樹 マ 13期 柴田 訓子 マ 15期 佐野 哲雄(同乗)
 15期 松林 知一(同乗) 15期 上馬 康生 マ4

本隊 (小立野キャンパス午後1時40分発)

×とJR…車なし

(地域) 無しは金沢市・松任市在住

名前…24日の登山希望

顧問 前田 達男	×	
1期 仙田 厚太郎 (高岡)	マ4	3期 田村 昭夫 (福島) JR12:55
3期 小林 宜泰		7期 村田 泰恵 マ
8期 穴田 昭一 (小松)	マ4	9期 平村 耕作 (滋賀) JR12時
9期 吉田 幸造 (滋賀) JR11時		11期 小山 清 (高岡) ×
14期 清家 雅幸 (埼玉) JR午前		15期 舟田 節子 ×
15期 坂尻 忠秀 (穴水)	マ8	18期 椿川 利弘 マ4
18期 横井 恒雄 (大阪) JR11:59		19期 梶 典雅 マ4
20期 久富 象二 マ2		23期 鳥越 伸博 マ4
23期 小久保光将 (高岡) マ4		25期 辻村 善徳 マ4
29期 渋谷 敏行 マ2		31期 石倉 昭彦 マ
31期 水腰千佳子 ×		36期 石川 明弘 ×
36期 沢田 哲之 ×		36期 金井 一人 ×
36期 田中 充 ×		

25期 広田 秀和…集合場所を角間キャンパスと間違え、参加できず

29期 北村 智明・高木 美保…23日のみの日帰り

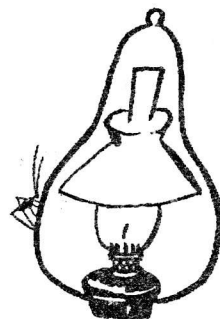
33期 奥出 俊一…22日に入山。23日に登頂、先に下山。

当日の係

受付・会費徴収…鳥越、舟田 企画・配車…梶 記念写真・追悼式…上馬
 懇親会進行…久富 高三郎登山隊長…椿川 慰心碑補修C…辰野

借用・手配

テント…梶 (いぬわし) 舟田 (ナカオ) 鳥越 (北国銀)
 トランシーバー・ランタン…梶 (いぬわし) カメラ…上馬
 ローソク、名札、歌集コピー、花束、貸出シュラフ…舟田
 工学部駐車の手配…前田顧問 尾川ダム駐車の手配…椿川
 参加者へ案内送付…舟田 高三郎登山者へ連絡…椿川
 現役へ買い出し金受け渡し…鳥越



宴の記

15期 舟田 節子

日程が決定した時には、当日は月齢2日あたりと判明する。月見…まあ、芸達者の多いワングルのこと代役に不足することはあるまい（すみません）。そしてまたも、台風が迫ってしまう。小屋があり、コースも東寄りだからと決行する。雨対策に大判ビニールシートを運んでいってもらってあるが、風雨となるとさて…。

23日。台風接近のフェーン現象で汗ばむような陽気。愁心碑補修の先発隊（13期 辰野、吉田、吉本、柴田夫妻 15期 上馬 佐野 松林）の8名は午前9時に出発。11時過ぎ、現役4回生の山本さんから電話。「ビールの受け渡しをする奴が、工学部へ行ったがOBが来ていない…といって僕の所へ電話が来ていますが…」。時刻の勘違いがあったことが判明。このビール2ケースは、結局正午発の4回生の彼等が運んでいき、倉谷川で冷やされて出番を待っていた。

坂尻さんの車で小立野キャンパスへ向かう。途中で14期の清家さんを拾う。彼は「金沢も変わったな」と歩いていたそう…こちらは、彼の町並を歩く後ろ姿に20年前かずっと戻ってきたような錯覚を覚えた。

工学部前にはすでに梶さんが待機していた。あたりは飾り立てた太鼓が並び、やたら騒がしい。尾山祭の集合場所にもなっていたのだ。続々…というより、ちらほらとOBが現れる。一昨年OB総会を開催し、記念写真も撮っているの、で、まずまずお顔は分かり、そこそこ話もはずんでいるようだ。

祭の挨拶の終わった山出金沢市長が、わざわざ車を降りて声をかけていかれるといったハプニングもあったが、梶さんの指示で便乗の車も決まり、出発する。25期の広田さんが現れず、鳥越さんの車がもう少し待つことになる。舗装道路や新しいトンネルに驚き、昔はどうのと言っているうちに、犀川ダムがせまる。高三郎もさっそく歓迎してくれる。



ダムの前で記念写真を撮り、BHへ向かう。舟付場までブルカ軌充した跡があり、この春ここが桂さんの倒れた場所と確認しておいた石積みも、あっけなく竊模様の下になっていた。すでに現役が通り、先発隊も通っていることから、道はまずまず。肩先くらいに茂っている所もあるが道は何とか判別できる。

19期高桑さんの碑の前で休憩。さっそく3期田村さんが正信偈をあげようとするが、本人も怪しく誰も唱和できない。それなら…と彼はザックから聖書(!)を引っ張り出し、ドイツ語で読み始める。もう、笑ってしまい、本当にワングルらしくて、何よりの供養になったように思えた。トランシーバーで、やはり広田さんは現れず、待機組もダムから歩き始めている旨連絡が入る。(下山後、本人からの電話で、角間キャンパスを集合場所と間違えてうろうろしていたことが判明。お気の毒で、「会費は不用」と言ったのに、「では寄付として」と三千元が振り込まれてきた。)

雨が落ち始める。この雨に急かされたか、一刻も早くBHを見たいからか、とにかくハイペース。山現役の私も必死で走り、ワングルOBの底知れぬ脚力を舌を巻く(たぶん一意地の張り合い)。後半の方が難所のはずだったが、出島からはきれいに草が刈ってあった。「さすが現役!」と感謝したのだが、実態は一キノコ取

りがボートで出島まで入ってきて刈っていくらしいとのこと。

ついに吊橋を渡り、倉谷に入る。廃屋が朽ち果ててからも久しく、石垣のみが残る平地である。ここで馬白君をだっこした29期北村・高木夫妻とすれ違う。天候があやしく、日帰りにするとのこと。同じ29期の渋谷さんも帰ろうとしていたが、石倉さんの顔を見て引き返してきた。

そこへ金髪のミリアムさんも混じった一行が歩いてくる。疲れた表情の彼等に聞くと、セメントに混ぜる砂利を「また」掘りに行くのだそうだ。やっぱり負担をかけてしまうが、「お世話になります」と最後の登りにかかる。

小屋の横では、先発隊が慰心碑を囲んでいる。最後の上部の台形の角度を検討しているようだ。柴田夫人によれば「あの時はねえ、もう疲れちゃってたらやらってたんだけど、本隊が上がってきたから、慌てて気合を入れてまたセメントをこねたわよ。」とのことだった。（詳しくは補修CLの辰野さんの原稿にお任せする。）BHを前に、13期、15期が並んでいると25年の歳月が過ぎたことが信じられない。皆さんにも懐かしさととまどいが入り交じっているようだった。

天候はいいかわらず怪しい。小屋で食当を始めてもらう。下で酒宴をやると、この急坂をお開き後に上がってこれるものやら？行方不明になって倉谷の怪談に加わる方が出てしまうかもしれない。梶さん、椿川さんがBH横の沢への道を開いてくれ、そこが氷場、途中はトイレとなる。その道の横にはかつてのトイレの残材が朽ちていた。（壊れたカマドの煉瓦の方は、今回慰心碑の骨材に利用された。）明るいうちにと記念写真にかかる。上馬さんに広角レンズを用意してもらい、カメラの1.5m前から広がる。現役も含めて70余名、何とか収まった。

続いて追悼。桂さんと同じパーティーだった上馬さんがあの時の状況を説明し、その後皆で黙祷する。（やはり同じパーティーだった横井さんは、この8月帰省中に木曽川で水死してしまった。この月見の宴は彼の49日と重なっていて、15期には万感こもる黙祷だった。）

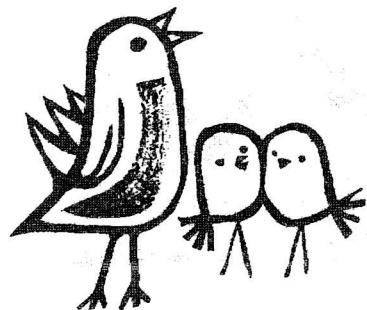
テント設営にかかる。私が借りてきたテントは備品の数を確かめてきただけ。（広げてはみたのだが、何しろ社会人になると、ますます女は食当、男は設営に分業されてしまう。一律に教えてもらえるワンゲルはホントにありがたい所なのだ。一人で無理してボールを折りでもし



たら…と、本の図解だけ眺めてフムフム) 案の定、ジョイントの角度が不明。テントを使っている堀さんや、18期横井さんも判らないというし、現役を引っ張ってきて聞いても型が違って判らないという…。弱りきったが、ボールの組み合わせをあれこれやって、結局かなりの力を加えてボールを反らせると嵌められると判った。それでも、最後のボールが押し込むべき穴に嵌まらず、石はないか? ベンチはないか? この難題に最後まで取り組んで下さったのが前田顧問で、私は二重に恐縮するはめになった。(それにボールも結局1本折ってしまったのだ。) 他の2つのテントも張られたが、始めてドームテントを見たOBは簡便なのにびっくりしていたようだ。

大判ブルーシートを2枚広げ、宴を開始。1期仙田さんの挨拶で乾杯。久富さんの周到な進行計画により宴はスムーズに一名前を読み上げて挨拶だけしてもらはうが楽しい一言、二言が次々と続き、予定どおり盛り上がっていく。マイクの奪い合いならぬ、「是非この機会にお知らせしておきたい」話が次々に出てきて、特に1期仙田さんと3期田村さんは、座を暖める暇もないくらい。私は記念誌の編集長で昔のBHは隅々まで読んだ方だが、百聞一見にしかずというか、やはり当事者の口から直接語られる迫力は格別。天候の方は雨がバラついたかと思うとまた止んで、星空が広がっていく。こんな倉谷の夜を楽しめるのは金大ワングелしかない。

おでんを空にし、笹寿司が廻り、アルコールは、ビール、日本酒、ワイン、水割がチャンボン…さあ、歌え、歌えとワングелソングが出てくる。何期の持ち歌、とやりだすと、それはこ



っちが先で、こっちが正調と歌い出す期もあり…。そのうち、あれ、現役は歌わないの? ええ知りません。じゃあ、夜はテントで何やってるの? ハハ、まあその…(そのうち聞いてみて下さい。きっとカラオケなんかはパフォーマンス付きで上手いだろうとおもいます。) それでも現役も歌え、歌えて、代表〇君がドスのきいた声で「兄弟舟」を歌う。そして是非是非と請われたミリアムさんが、アイルランドの歌を歌う。この時、田村先輩は実に幸せそうであった。

一応お開きとし、台風接近対策に明日の予定を全て一時間早めることにして、現役達は下へ降りて行く。お酒もおつまみもたっぷり抱えて、彼等もその後二次会を楽しんだらしい…。残るOBは朝からの重労働に眠り出す人や、四十周年のドイツ行きを発案する人や、いくつかの話の輪に分かれて、さらにアルコールが進む。私の方は、18期横井さん、20期久富さん、25期辻村さんと、「ワングелとは?」などという青い話題を、昔の続きのようにやっていた。時代を共有しなかったOB同士でも一緒に語り合える…この場所だからすんなりやれることのようにも思えた。「ワングелとは、自然を愛し…ではない。その前に、まず人を愛しなのだ」で「異議なし!」となり、浮世のことはきれいに忘れて、ワングел万歳で、テントにもぐりこむことにした。

それにしても何という宴の跡…

「いやあ、はでにやったね。」

「明日これを見たら現役はキレますよ。」

「しゃあない。明日早く起きて一緒に片づけよう。」OB1年の石川さんと約してお休み。

24日。雨は夜中に少しバラついた程度。ねぼけ眼で片づけにかかる。空罐は8期穴田さんが、学校で集めているからと、まとめていかれる。どうやら皆も起きてきて、現役が上がってきた頃には片づいた。

愁心碑の木枠を外す。うまく固まっている。化粧塗を施す。もう一つついていたパネル(建

立の由来を記したもの)は見つからず、新たに作ってとりつけることにする。聞いてみると、25期の頃にはもうなくなっていたらしく、36期になると、何の碑なのかも知らなかったとのこと。私達にした所で四半世紀、何もできなかった。自己満足の次元のことかもしれないが桂さんの御実家へは追悼したことをお伝えしておきたい。

テントを撤収し、朝食におじやをいただいて、OBは先に引き上げる。ダムに着き、解散の挨拶をして車に分乗した時には大粒の雨が降り出した。(現役達の方は30分後になった程度と聞いた。)

ここで終わりにすればいいのに一掃りの車の中での話。3期小林さんの今の趣味は、シュノーケルと足ヒレと救命具をつけてダム湖を泳ぐことなのだそう。オレンジ色では目立つので迷彩色のを装着し、ボートの人が見たらびっくりするだろうからと、慌てて流木の陰に隠れたり気も使うとのこと。オロロが来るから湖の真中を泳ぎ、あがる時は彼等の活動が静まる夕方まで待つが、それでも襲われて服を着るまでがたいへんなのだそう。今でも、山道の奥まで行きたくなり、通行止めの標識をずらして入り込ん

で行くそう…。ちなみに彼は金大ワングルの遭難第一号。これを笑って聞いていらした、捜索隊長第一号の仙田さんは、またの出番の予感におののかれていたように一思われたのでした。

反省会(といっても懇親会ついで)では「連れのいたOBはいいか手持ち無沙汰で淋しそうなOBもいた。お客さんということでなく、仕事を割り当てたり、現役と同じパーティーに入ってもらって、一緒に食当をしてもらってもよかったのでは」

「もっと現役に負担をかけない形を考えたら」「事故には余り萎縮してほしくない。本来自分の体は自分で守るべき。しかし<苦しい>が言えるクラブにはすべき、それは大事にしてほしい。」

の意見が出ました。他は、参加者の返信をご覧ください。

忘れ物 ゴアテックスのカップ上下

(ダンロップ製 青色 M寸)をお預かりしています。心当たりの方、事務局へご連絡下さい。



会計報告は、OB会会計報告の方に掲載してあります。ベルクハイム修復と愁心碑補修を同時に行ったことや、会費は飲食費相当としたため、69,876円の赤字が出ております。以上のベルクハイム修復、愁心碑補修、月見の宴を、全OBにご協力いただいたと解釈して、OB会会計よりの援助として処理致しました。ご了承下さい。

愁心の碑に寄せて

13期 辰野 隆義

OB会報「やまざと」3号が届き、パラパラとページをめくっていると、突然自分の名前が目飛び込んできました。

「…愁心碑を補修・除幕(?)します。この補修構想は13期辰野さんが練り…」寝耳に水の私は、さっそく会長の大島君に電話を入れました。その結果は

「悪い、悪い。言うの忘れとった。」の一言。

(編者注;辰野さんに依頼することは、昨年10月末の懇親会にて、「辰野に頼んどくワ」の彼の一言で決まっておりました。続く6月現役との打ち合わせの際も明言していただきました。それでもこうなってしまうのが、いかにもワンゲル的で、それでもやれてしまうのが、これまたワンゲルのスゴイところだと思われるのです。)

準備期間はもう一ヶ月を切っている。あわててイメージスケッチ、資材の手配、型枠の製作と、どうにか間に合わせることができました。

本番では現役の方々に重いセメント袋や砂、

砂利などを運び上げてもらい、本当に感謝しています。(編者注;セメント重量から割り出すと、500kg 近い荷揚げをしてもらったようです)そのお礼の意を込めて、作業に携わってもらった人達全員の名前を書いた木板を基礎の中に埋めました。

愁心の碑の経緯については、他のOBの方がきっと書いてくれると思いますので、碑のプレートについて書くことにします。

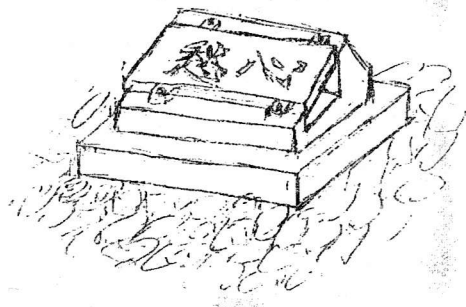
「愁心」は当時顧問をしていただいた松尾先生に題詞を、また教育学部の米林先生に製作をお願いしました。そのプレートを今回も使い、碑自体は前回の木製の物とは違い、かなりしっかりした物となりました。もしベルクハイムに行く機会がありましたら、見て下さい。また、現役の方々は、この碑を見たら自分の山行を振り返り、安全な山行を心掛けていただければ幸いです。

最後になりましたが、桂君の冥福を心からお祈り申し上げます。

由来を説明したパネルの方は紛失しており後日製作、取りつけることにしています。

愁心

「昭和四十五年五月三十一日に行われた新人トレーニング中、ダム湖畔にて突然の心臓発作に襲われ、永遠に帰らぬ人となった故桂 茂樹君に捧ぐ。」

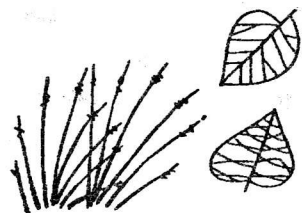


倒れていた山小屋の「愁心の碑」が再建された。その前で、月見の宴に参加の多くの人たちと共に黙祷していると、今から25年前のことが思い出されるのであった。大学に入ってから2か月足らずしかたっていない5月の終わりに、それは突如として起こったのである。同じ新トレのメンバーであり、また同じ理学部のクラスであったこともあり、桂氏の死はその後の私のなかになかなか深く残るものとなった。ことば数は多くはないが穏やか口調で話していた顔。城内の部室から一緒に卯辰山まで走り、相撲場の階段をお互いに背負いながらトレーニングに汗を流した時の顔。そして新トレの山道で、休憩の時に何か言葉を交わしている紺の山シャツ姿の顔など、今でも頭の中に残っている。

その後、倉谷や高三郎山には何度も入った。残雪の山道にイワウチワやカタクリの咲いていた春。草いきれの倉谷廃屋でイヨシロオビアブの大群にまわりつかれた夏。紅葉の見事な山頂から、澄んだ青空にくっきり映える白山や北アルプスを眺めた秋。トタン屋根を藪が叩く小屋の中で、あかりに集まるクサギカメムシを見ていた冬、等等。小屋作業やバーワン、そして4年生から大学院にかけての4年間は鳥類の研究のため、多いときは月に4回も高三郎山のきつい山道を一人で歩いた。社会へ出てからも何度か入山してきた。山へ入るたびに、犀川ダムの途中の石積みの前（桂氏の倒れた場所…今は草に埋もれて分からなくなっている）で、そして山小屋の「愁心の碑」の前で、黙祷しながら彼に私の日常のことなどいろいろ聞いてもらっていた。そして彼の分まで生きなければと自分に言い聞かせていた。

誰だって必ずいつかは、この世に別れを告げなければならないときが訪れるのである。この年にして、同世代の身近な人との別れをいくつも経験してきたが、そのたびに自分の生き方の反省と新たな決意を思い浮かされてきたように思う。

「愁心の碑」は、私にとっては学生時代を思い出させるものであり、日頃の生活や山に対する姿勢を考えさせてくれるものである。加えてこれからは、25才も違うワングルの後輩と一緒に作業をして再建したことを思い出させてくれるものである。これからはできれば年に一度くらいは訪ねて行かねばと思っている。



月見の宴参加者からのお便り

(受け取り順)

*3期 田村 昭夫

拝啓。写真有り難うございました。

決してアップに耐えられそうにない我々が最前列にあることが、皆様をワングルから足を遠ざけるのではないかと反省されます。私が欠席することによって多数のOBが出席されるなら、喜んで欠席いたしましょう。

それにしてもワングルにしかアイデンティテ

ィーを持たない人間も多いことを知り、安心しました。

金大ワングルは永遠です。

敬具

*23期 小久保 光将

お月見とはいきませんでしたが、BH隣での酒宴は楽しかったです。40歳近い開きを気にさ

せない活気はワングルならではのものと感じ入

りました。

それにしても草創期の先輩方のパワーには、お会いするたび恐れ入ってしまいます。

別の機会があればまた参加したいと思っています。

事務局各位、現役の皆様には、格別のお世話をいただきありがとうございました。

*9期 吉田 幸造

先日は現役の人の多いのにあらためて感動したのと、僕等の時にあれだけのOB会支援ができたかどうかと感謝する次第です。

気分よく久しぶりに無茶飲みをし、若い頃の体験がよみがえりましたが、回復が遅く苦労しました。

大学2年の娘が居ますが、KUWV現役のための垢を煎じて飲ませたい感じです。

今後共よろしく願ひ致します。



*36期 石川 明弘

最近めっきり山行回数が減少していた中で、今回の飲み会は山行ではないにしろ、ワンゲルの雰囲気とでもいうのでしょうか、個人的には石倉さんに会えたので良かったです。

雨がいつ降るかという状況もツキがあったのでしょうか、何なくクリアして良かったです。これも役員の日頃の行いのよさなのでしょう。

今回は40周年ですね。その時は就職しているはずなので、お金をたんまりもって、同期の奴等と朝まで飲んで、それからお酒の匂いをブンブンさせて40周年へのりこみたく思います。

*8期 穴田 昭一

30年という長い歳月の経過を忘れて、KUWV現役時代のような楽しい、懐かしいひとときを過ごさせてもらいました。

現役部員の皆さんとOB会事務局の皆さんの後苦労は大変だったと思いますが、皆さんのお世話のおかげで、久しぶりにわが青春時代のホームグラウンドを訪れることができ、本当にありがたく思いました。

初代ベルクハイム建設時に、熊笹の根を掘り河原から石を運び上げ、倉谷の廃屋から材木を運んだりなどの肉体労働を提供した者の一人として、ベルクハイム再建後、この催しがあるとお知らせを受け、喜んで参加させてもらうことにしました。

残念ながら8期の参加は私だけでしたが、7期の村田さん、そして遠方から参加してくれた9期の平村、吉田両氏、11期の小山氏らと旧交をあたためることができ、本当によかったです。また、田村氏を初めとする創部当時の大先輩達の老いて（失礼！）ますますエネルギーあふれる姿に接し、「我々もがんばらにゃ」と思いました。

5-11期のなつかしい皆さん、次の機会には是非参加しましょう。四十万さん、吉村さん、ナベちゃん、博道くん、皆さん、待ってますよ。

*13期 吉本 良治

犀川ダムまでの快適な舗装道路、それにひきかえダム湖周辺の道の荒れ方のすさまじさは、共に、過ぎ去った年月の重みを感じさせるものでした。

しかしひとたびダム湖畔に立てば、「あの角を廻れば犀川ダムが見える」そんな思いで歩みを進めた数多くのBergheim行きの思い出、そんなそんな遠い日を一気に呼び戻してくれました。

我々の年代には格別の思い入れのあるBergheimですが、地元にいながら車社会に毒された身には出掛けるには腰の重いのがげんじつであり、このような計画をされた事務局にあらためて感謝します。

また、朽ち果てていた慰心碑の改修作業、Bergheim改修、山行の設営に、多くの現役諸君の御協力をいただいたことにお礼申し上げます。

なかなか眠れず夜半に眺めた満点の星空に感激し、「やっぱり山はいいな」との思いを深くしました。

非常に素晴らしい企画で是非これからも続けることができれば良いと思います。このような企画は、現役諸君とのつながりも大切ですが、

あまり負担を掛けずに、自分達が企画から運営までができれば長続きするのではと考えます。

*25期 辻村 善徳

先日は本当にありがとうございました。おかげ様で久しぶりに学生の頃の気分で山登りができました。

登山は年に2、3回行きますが、扉奥となるとなかなか行くこともできず、大変楽しめました。またそれ以上に、わがワンゲルの1期の方から現役の人達にまで会い、今さらながら金大ワンゲルのふところの深さを実感しました。またこれからこのような機会がありましたら、是非出席したいと思います。

事務局の皆さんもいろいろと御苦労なことと思いますが、今後共よろしく願います。

*18期 椿川 利弘

台風の影響で「月見の宴」は「やみ夜の宴」となりましたが、それはそれでワンゲルらしくて楽しいひとときでした。

私としては、高三郎登山隊長を命ぜられ、意気込んでいました。しかし、メンバーの同意を得て（いや、メンバーを説得して）中止を決めるや、ビール、ワイン、酒、ウイスキーとチャンポンで飲み、早々とダウンしてしまいました。そして結果的には役員として何もできず、ただ現役に感謝する次第です。

*23期 鳥越 伸博

台風をやや心配しながらでしたが、10年以上振りに訪れたBHは昔の面影そのまま、大変なつかしく昔を思い出しました。参加していただいたOBの方々も一晩だけの短い時間ではありましたが、楽しい一時を過ごしていただけたのではと思います。

また、今回の企画に関しては、実行面において、現役の皆さんに大変協力してもらい、この場を借り、今一度感謝するとともに、OB会の運営にあたって、現役との交流のあり方について、今後ともよりよい形を考えていく必要がある

と再認識させられたような気がします。

OBの皆様には、OB会が末永く続くようにまた何かとご協力の程よろしく願います。

*13期 吉田 穂積

OB会事務局の方、現役の方、どうもありがとうございました。御苦労様でした。

BHまでの道は草木がおい繁り、昔と随分変わっていた。スベリ易いBH直前の急登を登ると変わらぬBHが建っていた。中はきれいに床張りがしてあったが、囲炉裏がなくなったのはちょっと寂しい気がした。

「月見の宴」は親子以上の年齢差の集まりでワンゲルの歴史を感じる。

大先輩から草創期のエピソードを初めて伺い、またワンゲル唱歌の変遷等を感じたり…と、楽しく過ごしたが、500mlのビールとほんの少々ウイスキーでダウンしてしまい、お開き後は早々にシュラフにもぐり込んでしまった。BHでの酒飲み話はさぞにぎやかだったろうに、残念ながら私は夢の中。翌朝は台風接近の為、早々に下山し、ゆっくり話しはできなかったが、なつかしい顔に出会えただけで良かったと思っている。

*3期 小林 宣泰

月見の宴の企画御苦労様でした。さすがクラブに女性がいると、同じことをやるにしても、名前が違うことがわかり、この言葉にひかれて出席したところもありました。

今年の夏は都合がつかず高い山へは行けませんでしたので、体力が持つかと思いましたが、どうにかもちこたえ、自信ができました。

「広田君」のような奇人がおれるクラブであって下さい。

*19期 梶 典雅

今回の月見の宴では、チーフということで企画、その他をおおせつかりましたが、現役諸君をはじめ、OB会役員の皆様の御蔭で、何とか無事に終えることができホッとしています。あ

りがとうございました。

ベルクハイムでのOB会は大きな意義のあることは無論ですが、アクセスや人数を考えると、どこかのキャンプ場（例えば医王の里）でやるのもよいかと思います。

*20期 久富 象二

過去を懐かしむのはあまり好きではありませんが、この日ばかりはワンゲルというクラブを選んでよかった（選んだ時はたまたまだった）と、つくづく思いました。久々に痛快に飲み、歌い、語りました。



17期 小島 敬

拝啓 この炎暑、いかにお過ごしでしょうか？
東海ワンゲル会（7月1日）で皆が集まってから、早いものでもう1ヶ月が経ちました。当日は、遠路はるばるお出いただき、本当にありがとうございました。高三郎・ベルクハイム・白山のスライド映写会は大好評で、山への想いをかきたてられた方も多かったようです。

名古屋の酷暑に辛抱できず、早めに夏休みを取り、恒例の家族登山をしてきました。近場の3000m峰で、簡単に行けて混んでいない山、ということで、飛騨側の濁河温泉から御岳山に登りました。御岳山の南部（剣ヶ峰、一ノ池）は

もう一つ、当時クラブを預かった者として、いろいろあったけれど、20期でクラブを潰さなくてよかったとも思いました。

現役の方達には楽しい一夜を催してくれて心からお礼を言いたい。元気で活動して下さい。

*29期 高木 美保

楽しみにしていましたが、台風が近づいて、1才の子供連れだったので、日帰りにしました。懐かしい夜を過ごしたかったです。また、いつか…。

今なお火山活動が盛んで、植物も少なく荒涼としていますが、北部（継子岳、四ノ池）はハイマツや高山植物が多く、まるで別の山のようにです。コマクサの群落やクモマグサをみつけ、半ば諦めていた雷取りの親子にも出会うことができました。

会で撮った写真の発送が大幅に遅れ、申し訳ありません。もう一人のカメラマンの渡辺君から速達でネガを送ってもらったにもかかわらず、こんなに遅れたのは、ひとえにワンゲル時間のなせる業です。

ワンゲルOB・OGのよしみでお許し下さい。
またいつの日か、お会いできるのを楽しみにしております。 8月1日 敬具

21—23期合同同期会

23期 石地 隆司

最後の峠を過ぎると、右前方より後立のモルゲンローテに輝く山々が目に飛び込んできた。ようやく明けてきた空だがはっきり青空とわかる。ほどなく国道を右に入り、急坂を登っていくと、アルプス館の駐車場に着く。長浜を出て5時間余り。「あーやっと着いた」と一息。無事に着いたことより、＜天気・道路状況とも問題なく、これでみんな無事に集まってこられる＞という安堵の方が大きかった。

今年の2月11・12日の両日、我が23期は懐かしの白馬・乗鞍スキー場にて同期会を行った。我々の現役の頃利用していた白樺館は経営者も変わり、例の＜離れ＞も今はパン屋さんになっている。で、現在現役が利用しているアルプス館にお願いしてみたが

「シーズン中の連休は貸切でないと困る」ということなので、23期だけでは足りず、21・22期の長野近辺の先輩達にも参加を呼び掛けた。結果的に21—23期の合同同期会になったわけで、いつもの同期会とは趣向が違って、先輩を囲んでいろいろ懐かしい話ができて、これもまたいいものであった。

23期は金沢在住者が数名いるせいか、横のつながりが強いようで、同期会も何度かやっている。最初の頃は結婚祝い会と称して、度々金沢に召集がかかったし、その後も白山登山や、2年の時亡くなった鈴木信司の10回忌静岡ツアーなどがあった。そして前回は、富山在住者が主体となって立山山麓ツアーが行なわれ、

「次回は関西が何かやれ！」

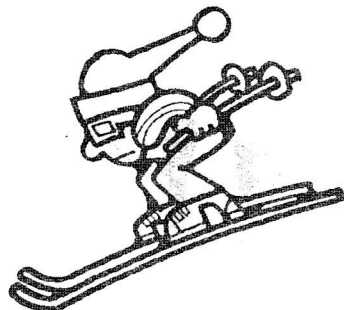
ということになって、今回のスキーツアーになった次第である。ただ、今回はスキーということで、まだ我々の世代の子供達には少し早かったようで、嫁さん・子供を連れてきてるのが少なく、よけい人数不足になってしまった。もう何年か後にやると家族ぐるみで参加できるスキーツアーになるかもしれない。

1日目・2日目ともスキーは各自フリーにして団体行動をとらず、夕方宿集合、翌朝解散としたので、メインは必然的に宿での宴会になった。とはいえ、普通ならスキーできないのにここまで来る者はいないのだが、当日披露宴が入ってしまった宮西と所用で来れないという見成は、夜車飛ばして2次会？には参加してきたし、骨折で運動はドクターストップ中の鳥越も

「宴会は出る」

と言って参加してくれた。このあたりが23期連中のすごいところだと思う。次回は再び金沢部隊がやるらしいので、何を企画してくれるのか今から楽しみである。

ちなみに、白馬・乗鞍、コルチナのゲレンデ情報を少々。我々の現役の頃の白馬・乗鞍はワッゲルボンチョやWヤッケがよく似合う超マイナーなゲレンデだったが、今はかなり様相が違っている。シングルばかりだったリフトは、高速ベアトリプルやクワッドに変わり、長さも長くなっている。ゲレンデそのものも、横に上に大きく広がっている。ボロボロの木造レストハウスも2—3年前に新築になったし、かなりメジャーになりつつある。昔に比べれば、人は増えたがそれでも堀池や八方尾根程多くないので、いまだに穴場的な存在なのではないだろうか。北廻りで行くと最初のゲレンデだし、若栗の南隣には日帰り無料駐車場もあるし、長野五輪に向けて国道の整備もかなり進んだ（大仏峠越えもトンネルになりました）ので、近辺の方、懐かしのゲレンデで一度滑ってみてはいかがでしょう。



24期同期会報告および次回開催の案内

私達24期は、35周年記念総会・懇親会で久しぶりに会ったのを契機として、その翌年（94年）から同期会を開いています。

94年はワンドルOBらしく中央アルプスに行くことを計画し、多くの人の参加をよびかけました。ところがよびかけが遅くて日程の都合がつかなかったり、「年をとって山に登る自信がない」などといったきわめてジジくさい理由などから参加者わずか5人という寂しいものとなっていました（もっとも参加者からは、「久しぶりに山に登って面白かった」とか「不安だったが、まだ山に登れる体力があることがわかって自信になった」という一定の評価は得られていました）。

そこで95年は前年の反省の上にたち、鹿島槍の麓にある青木湖キャンプ場で1泊2日のキャンプをしました。8月19・20日のことです（参加者は最後に記載してあります）。

集合は19日13時現地としたので、おおむね近いものから順に到着し、めいめいテントを設営してゆきました。

特徴的なことは、みなが持ってきたテントのほとんどがダンロップ（1つだけ別のテントだったがそれもエスパー）ということでした。私達が現役頃はまだあの「重くて立てるのがめんどろな三角テント」が主流で、ほんの少しだけあったエスパーやダンロップは羨望に近い気持ちをもっていましたから、それがこんなところに反映されたのかもしれませんが。

テントを張ってから何をしていたかという、これが別段何をするというわけではなく、酒を飲んで四方山話をしていました。黒岩君がカヌーをもってきたのですが、これも年をとってみんな保守的になったのか、「これはひっくり返るかも知れないなあ」「水、冷たいなあ」とぶつぶつ言って誰も乗ろうとはしない。せっかく持ってきてくれたのに申し訳ない次第だが、しかし後にカヌーはたいへん役に立つことにな

るのである。

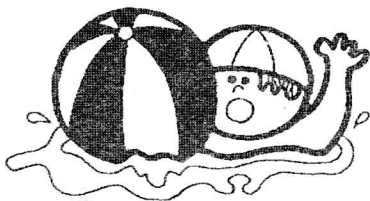
さて卒業後10年余りにもなると、体型および頭髮のほうにも各人かなりの差がでてきます。事細かに書きますとなにぶん支障がでますので、あいまいに書いておきますと……。

参加者大人九人のうち、女性二名と男二名は体重・体型・頭髮の点で学生時代とほとんど変わりありません（女性については、さすがに体重を聞くことはいたしませんでしたが、体型が変わっていないのでそういうことにしておきます）。後は「若干体重が増えたかなあ」というのが二名。「かなり増えたなあ」というのが一名。髪の毛の減少に反比例するかのように「メチャメチャ体重増えたなあ、これでむかし山に登っていたなんて信じられない」というのが二名。ちなみに最後の三人の体重を合計すると270kgで、これにはみんな笑わせてもらいました。

つぎに子供たちについて。最初、子供たちが仲よくしてくれるか少し心配でした。親同士は旧知のあいだがらとはいえ、子供たちはみな初対面。そんなわけで初めは子供たちも少しよそよそしそうでした。が、親同士と一緒に飲んだくれているのを見て安心したのか、もともと子供の適応能力が高いのか、あっという間に仲よくなってしまう、大人を放ったらかしにして子供は子供同士で遊んでいました。仲がいいのは結構なのですが、なれてくると子供達もだんだん悪いことをしはじめるようになり、あげくには食器を湖に流してしまったのです。

それで食器を拾いにいかないといけないうけなのですが、これが岸からはとても届かないところまで流されていってしまいました。そんなわけで黒岩君がヘッドライトを頭につけ、食器を取るためにカヌーで真っ暗な青木湖にはいってってくれました。さすがにカヌーはえらいもので、あっという間に食器のところまでたどり着き、無事にこれらのものは回収されました。食器が無事に回収されたときは、みんな——さっきまでカヌーをないがしろにしてきたことも忘れて——「黒岩あ、カヌーっていいもんだなあ」と言って黒岩君をたたえたのでありました。

子供達の話がさらに続くのですが（なにしろ大人達はただひたすら酒を飲んでえんえんと雑談をしているだけですから）、子供のなかにはいつのまにかアベックになってしまい者もいて、この子たちは大人および他の子供をないがしろ



にして二人の世界をつくりあげ、暗闇のなかに消えていってしまうのでした（単に〇しか女子大生かわからないけれど、そこのグループのところにいったかわいがってもらっていたというだけのことですが）。この二人はその後「一緒に寝る」だの、温泉では（後述）「一緒にお風呂に入る」だのと言いだし（実際に温泉では二人とも男風呂でなかよく温泉に入っていました）、大人達もすっかりあきれはて、好きなようにさせておきました。

この日は、その後花火などして遊び、いつのまにか寝てしまいました。

次の日、早い者は5時くらいから起きはじめ、湖をながめながら色々雑談をし、黒岩君はカメラに乗って青木湖にかけ（あれくらい自由にカメラがあやつれたら面白いだろうなと思います）、他の者も次第に起きはじめました。

みんなで朝御飯をつくり、その後テント場をあとにしました（写真は出る直前のものです）。青木湖を出てからは、大町温泉群に風呂に入り、その後昼食を取り、来年の再会を約束して別れたのでした。

さて前述の子供カップルですが、大人達の間では「これだけ仲がいいと別れるときも『一緒に帰る』などと言って困らせるのではないか？」と心配するむきもあったのですが、別れぎわには二人とも「バイバイ」と言ってあっけなく別れたのでした。

さて24期の人達への来年の案内です。

ごぞんじのように、開催日時はこれまでその年の担当者がみなさんに事前に希望日を聞いてそれから決めていましたが、来年からお盆あけの土日に固定してしまうことになりましたので、この場を借りて連絡しておきます。来年はおそらく8月24・25日になると思います。場所はまだ未定です。来年もキャンプにしようという意見もありますが、反面で「登れる体力があるうちは山にいきたい」という意見もありますから。

また担当者のほうから連絡がいくと思います。なお、連絡に対してせめて返事だけはお願いします、往復ハガキで連絡しているのですから。

参加者は以下の通りです（50音順・敬称略・年齢は当時）

麻田 正 弘	壮馬（そうま）君（8つ?）
佳津子	拓馬（たくま）君（4つ）
加納 雅 之	佳奈（かな）ちゃん（4つ）
慶 子	理沙（りさ）ちゃん（2つ）
酒井 智 治	瞭（りょう）君（4つ）
黒岩 達夫	坪井 陽典 仲村 正一
樋口 隆樹（25期）	



総合移転の歩み

昭和51年10月	評議会に将来計画検討委を設置
53年11月	評議会にて総合移転（200ha構想）の方針を決定
54年6月	評議会にて総合移転候補地として三小、金川、角間の3地区を選定し調査検討を開始
55年4月	石川県が「金沢大学総合移転対策本部」設置評議会にて総合移転地を角間地区に決定
59年10月	造成工事に着手
62年9月	文法・経済学部棟を竣工
平成元年8月	文法・経済学部および附属図書館が移転
4年10月	大学会館が開館
10月	理学部が移転
5年9月	教育学部が移転
7年2月	教養部が移転
5月	大学本部、大学教育開放センターが移転、国際交流会館が開館
	総合移転第一期事業完成記念式典

以下は、北国新聞11月3日付「金沢大学特集」を再構成しました。「今の金沢大学」をご覧ください。

p.32上段記事、ミリアム・グリーンさん（写真右端）と三浦永士さんはワネル現役部員です。

金沢大学の校章



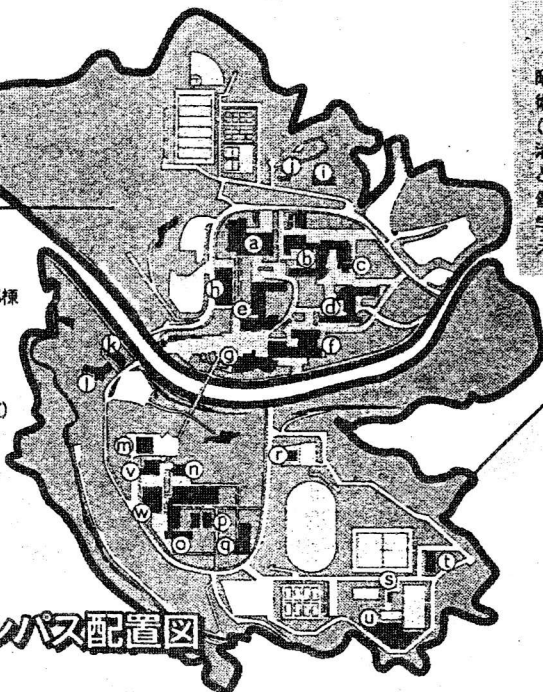
北キャンパス

- ④体育館（屋内運動場）
- ①教育学部棟
- ②北福祉施設
- ④文学部・法学部・経済学部棟
- ③教養部棟
- ①附属図書館
- ②大学会館
- ②エネルギーセンター（中央機械室）
- ①プール
- ①北部課外活動共用施設

南キャンパス

- ④大学教育開放センター
- ①国際交流会館
- ②本部棟（事務局・学生部・保健管理センター）
- ②南福祉施設
- ③理学部棟
- ②極低温研究施設
- ④RI実験施設
- ①南部課外活動共用施設
- ③馬小屋
- ①弓道場
- ④植物園
- ②総合情報処理センター（建設中）
- ②講堂（計画建物）

角間キャンパス配置図



角間キャンパス

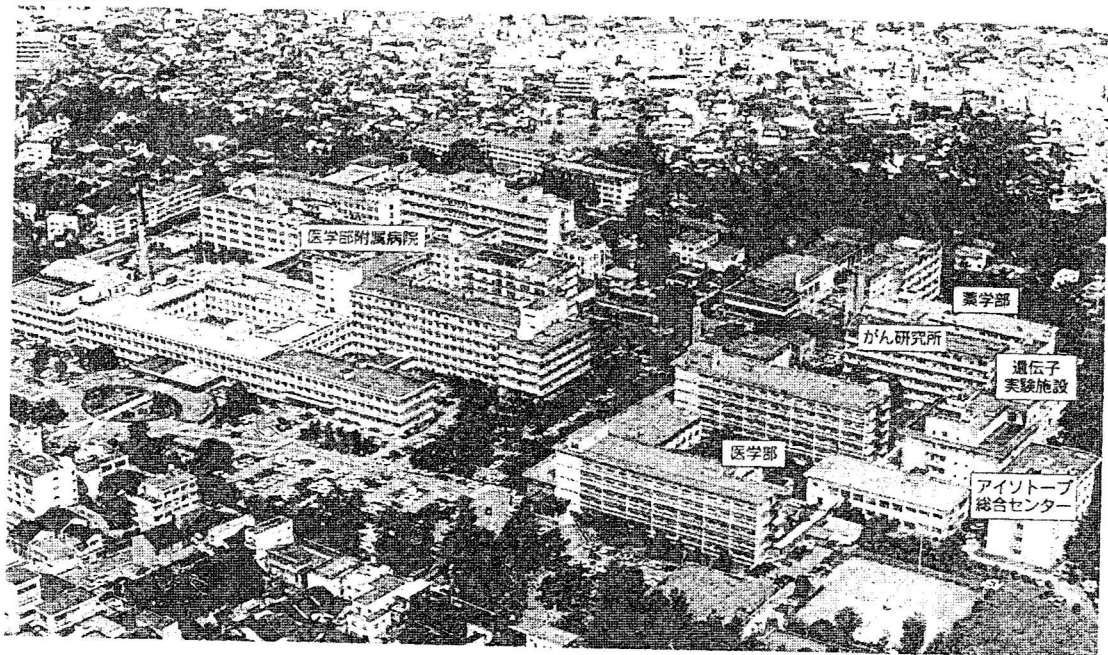
映えるレンガ色の施設群

金沢大は八学部、一研究所、一附属図書館、二附属病院、五附属学校からなる総合大学である。城内地区、宝町地区、小立野地区などに分散し、それぞれが手狭になっていたことから、これらを統合して社会の発展に対応できるように整備、拡充する必要が生じ、移転計画が始まった。

第Ⅱ期に工学・薬学部、がん研移転

昭和五十三年十一月に評議会にて総合移転の方向が決定され、医学部及び医学部附属病院を除くすべての大学施設を早急に角間地区二百haに移転する構想が打ち出されたのである。総合第Ⅱ期事業として城外の工学部、薬学部、がん研究所が角間キャンパスに移転する計画であり、八年度は建物の配置などの設計を行う予定である。

▼宝町キャンパス



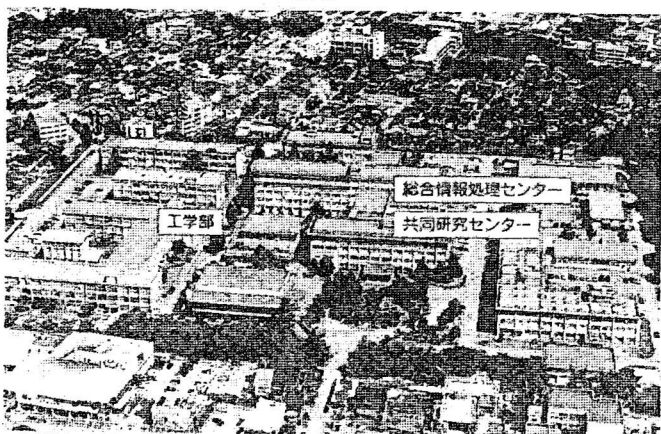
金沢大学特集

来たれ金大へ!

宝町キャンパス

医療短大に代わり
医学部保健学科新設

八年四月から学生を受け入れる
新設の医学部保健学科(四年制)は、
医療技術短期大学部(三年制)から
移行再編された学科で、医療の高
度化に伴い医療技術者の高等教育
をさらにレベルアップするのが狙
いとなっている。医療短大の四年
制移行は全国の国立大学では三番
目で、看護学、放射線技術科学、
検査技術科学、理学療法学、作業
療法学の五専攻は最大規模となる。



▲小立野キャンパス

小立野キャンパス

総合情報処理センター
七年度中に角間に移転

工学部のある小立野キャンパス
内の総合情報処理センターは、7
年度中に角間キャンパスの本部棟
近くに移転新築される。工学部が
約70%近く使用しているコンピュ
ーターなどの機器は、新キャンパ
スでも工学部の使用ひん度は高い
ものの、文字通り全学の情報処理
センターとしての機能が整えられる。

Data 7 【産学官協力】

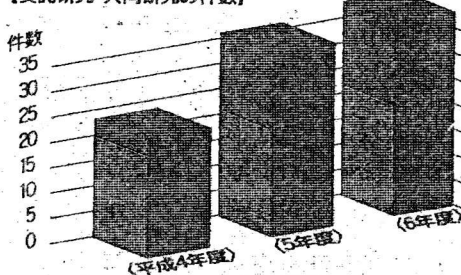
企業や自治体と38件の受託・共同研究

■国立大学は民間企業や地方公共団体などと連携して研究協力を推進することが求められており、金沢大では平成6年度、受託研究22件、共同研究16件を実施した。

■近年の実施件数の伸びは著しく、2年間で約65%増となっている。

■昨年度の受託研究には「白山の高山植物に関する研究」など、共同研究としては「産業廃棄物焼却炉に関する研究」などがある。

【受託研究・共同研究の件数】



●「受託研究」とは民間企業などからの委託に基づき大学の教員研究員が公務として行う研究である。
●「共同研究」とは民間企業などから研究者と研究経費を受け入れて、大学の教員研究員と共通の課題について共同で行う研究である。

■ = 共同研究
■ = 受託研究

Data 8 【附属学校】

園児・児童・生徒は約1,700人

■金沢大には教育学部附属学校として、明治7年開設の石川県立学校附属小学校の伝統を受け継ぐ小学校をはじめ、中学校、高等学校、養護学校、幼稚園がある。

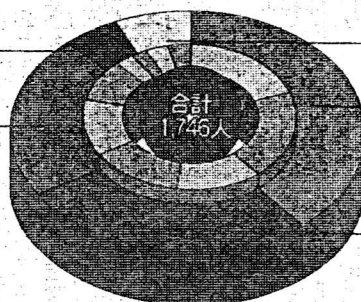
■ことし9月、小学校、中学校、幼稚園が平和町キャンパス（高等学校横）に移転統合し、新たに生まれ変わった。

■ここで学ぶ園児・児童・生徒約1,700人に対し、107人の教育職員による充実した教育が行われている。

養護学校 68人
男57% 女43%

高等学校 393人
男58% 女42%

■ = 男
■ = 女



幼稚園 133人
男52% 女48%

小学校 678人
男50% 女50%

中学校 474人
男50% 女50%

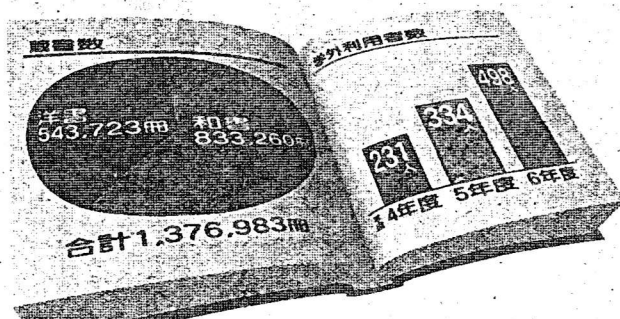
Data 9 【附属図書館】

和・洋書合わせて約138万冊

■金沢大学附属図書館は角間キャンパスの中央図書館、宝町キャンパスの医学部分館、小立野キャンパスの工学部分館で構成されており、3館合計の蔵書数は和洋書合わせて約138万冊、雑誌約2万9,000種にのぼる。

■蔵書の中には放蕩鳥獣（あけがらす・ばや）師寄贈の「読鳥文庫」、江戸時代の文庫を集めた「用和堂文庫」、「北条文庫」などがある。

■市民への開放事業として上記3館とも資料の閲覧、文献の複写などのサービスを実施している。



Data 10 【附属病院】

ベッド数832床、1日平均患者数は約2,300人

■医学部附属病院とがん研究所附属病院の二つがあり、医学部附属病院には内科3、外科2のほか核医学診療科など計19診療科、がん研附属病院には内科と外科の2診療科がある。

■医学部附属病院は救急病院、特定機能病院などの指定を受けている。

■二つの病院を合わせて看護417人を含む796人（専任のみ）のスタッフが対応している。

病院名	診療科数	病床数	診療状況(平成6年度)			
			外 来		入 院	
			延患者数	1日平均患者数	延患者数	1日平均患者数
医学部附属病院 (宝町キャンパス)	19科	792床	353,699人	1,444人	265,406人	727人
がん研究所附属病院 (米原キャンパス)	2科	40床	17,467人	71人	13,227人	36人

※外来診療日数 245日

Data 11 【歳入・歳出】

歳出総額は約400億円。人口10万人規模の市に相当

■金沢大の年間予算は約400億円。これは人口10万人程度の市の予算に相当する規模であり、主な財源は国税である。

■国立大学の歳出は教育研究という性格上、人件費の比率が高く、金沢大の場合は約47%（187億円）を占める。

■近年、優れた研究者に一定の審査を経て交付される科学研究費補助金が増加傾向にあるほか、奨学寄付金など外部から受け入れる資金も増える傾向にある。（これらを合わせ、歳出の約35%）

【歳出 39,901】 単位は百万円

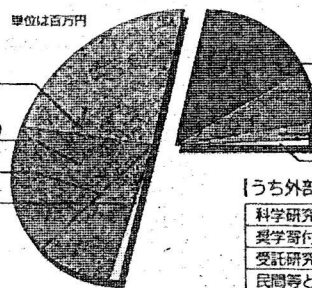
国立学校 17,923

大学附属病院 13,360

施設整備費 7,966

研究所 632

平成6年度



【歳入 18,456】

附属病院収入 12,547

授業料及び入学検定料 4,618

雑収入 1,189

学校財産処分収入 102

【うち外部資金 1,397】

科学研究費補助金	452
奨学寄付金	871
受託研究費	44
民間等との共同研究費	30

Data 12 【キャンパスの広さ】

総面積約160万㎡。石川県立野球場の約80倍

■金沢大のキャンパス総面積は石川県立野球場80個に相当する約160万㎡にのぼる。主キャンパスは金沢市内6カ所に分かれている。

■かつては「お城の中の大学」として有名だったが、旧城内キャンパスや附属小学校などがあつた旧広坂キャンパスは移転にともない使用されなくなったため、この数字には含まれない。

●角 間キャンパス 文法経教理理教農本部 ほか

862,000㎡

●宝 町キャンパス 医・薬・附属病院 ほか

133,000㎡

●小立野キャンパス 工 ほか

83,000㎡

●鶴 岡キャンパス 農学短大

21,000㎡

●平和町キャンパス 附属小・中・高・幼

73,000㎡

●東兼六キャンパス 附属児童

10,000㎡

●その他 総合運動場、四十万農場、飯口共同研修センター ほか

417,000㎡

合計 1,599,000㎡

各キャンパスの面積が「石川県立野球場（約20,000㎡）」の何割分かを表す。

石川県立野球場 10個分
石川県立野球場 1個分

北 國 新 聞

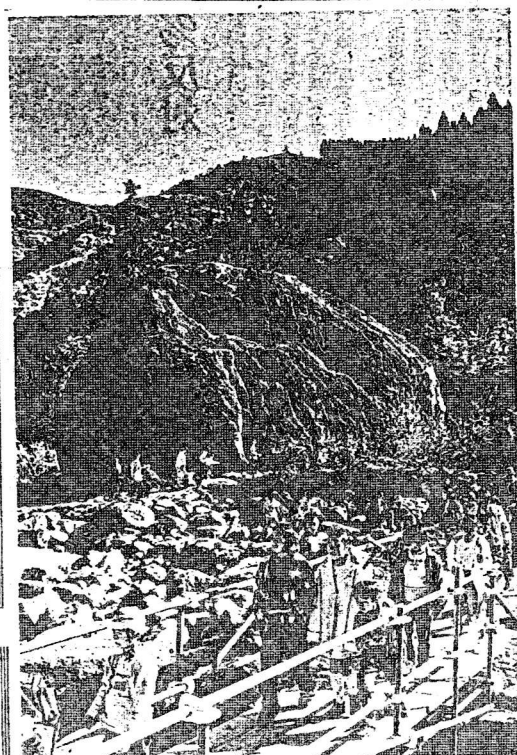
平成7年（1995年）10月29日（日曜日）

秋の深まりを見せる石川県白峰町の牛首川河川敷で二十八日、初の「百万貫の岩まつり」（手取川流域開発期成同盟会、百万貫の岩まつり実行委員会主催、北國新聞社など共催、テレビ金沢、エフエム石川など後援）が開かれ、親子や若者が自然とのふれあいに歓声を響かせた。

秋空の下、巨石に触れ

白峰で百万貫の岩まつり

初めて計測が行われ、四千八百三十九ト（約二万九千八百三十九立方メートル）もあることが分かった。まつりは全国的にも珍しい大岩を生かし、治水、治山事業の理解を得ようと今年初めて企画された。目下、冷え込みも厳しくなり、この日は金沢で七度、輪島で五・五度の最低気温を記録。平年を二・三度下回った。それでも日中は青空が広がり、河川敷では子供たちが小石に顔を揃く。ロックベントを楽しみ、父母らが自然散策で週末を過ごした。



「緑のダイヤモンド計画」

白山を「自然学校」に

登山中心から触れ合い型へ

白山を自然学習や野外レクリエーションの場として力をつける計画が動き出した。環境庁と石川県が二十四日まとめた「白山緑のダイヤモンド計画」の素案に、自然と森の学校をつたい文句に、白山を従来の登山中心型の活用から、県民が広く自然と触れ合う身近な場に整備する計画が盛り込まれた。白峰村の白山国立公園入り口付近から山頂近くまで、四地域に情報提供、教育の施設を整備する案で、環境庁と県は、県内の自然保護団体や学校教員らから意見、提言を聴いた上で今年度内に具体案を策定し、八年度から順次建設を進めていく。

県、環境庁が素案

4拠点に施設整備

環境庁と県がまとめた計画の白山地域(白峰村)を、利用誘導拠点、登山口の別と、施設を整備する。市ノ瀬地区は、日本を代表する景観を保全、活用する整備区を白山利用の主要拠点、南越ケ馬場・室堂を利事業の一環で、白山国立公園入り口の風見地区を、用前進拠点と位置づけ、四

地区にそれぞれの利用拠点とする施設を新設する。風見地区には、白山全域の自然・利用情報を提供する総合情報センター「白山国立公園センター」(仮称、市ノ瀬地区)には、自然解説員が常駐し、生薬案として整備する予定であ



白山緑のダイヤモンド計画で、「ビジターステーション」などの

この計画には15期上馬氏も携わり、他の国立公園のモデルにもなれるものを一と張り切っておられます。愛する白山に「こんなアイデアは？」をお持ちの方は、ご一報下さい。

緑のダイヤモンド計画

国立・国定公園の核となる地域で自然の保全、復元を図りながら、利用者が自然学習や探検を奨励するよう整備を図る環境庁の平成七年度からの新規事業。五十年事業で、初年度の今年は

の観察を行う自然体験プログラムの紹介する「市ノ瀬ビジターステーション」を新たに設置する計画で、別当出合では、現在の登山センターを建て替えて登山統括拠点施設としての機能を拡充を図る。

南越ケ馬場では、現在建て替えている休憩施設「セントラルロッジ」を、自然解説員が常駐する「白山国立公園センター」(仮称、市ノ瀬地区)には、自然解説員が常駐し、生薬案として整備する予定であ

白山地域(白峰村)と中部山岳国立公園の上高地(長野県安曇野市)の二地域が対象に選ばれた。

事業では、高山植物の復元保護のための歩道をほじめ、自然と触れ合う観察施設や情報提供施設、休憩所などの施設整備を進めていく。白山と石川県を合わせた総事業費は、五年間で約三十億円が見込まれている。

戦争と地図・情報

——戦後50年によせて——

筆者は11期。

財団法人 日本地図センター発行

「地図ニュース」1995-8 No-275 より

ながおか まさとし
長岡 正利

今年の元旦、各紙は多かれ少なかれ、戦後50年について述べた。大東亜戦争が完膚なき敗戦に終わって以来、戦争に突入するまでの思想や政治の流れを振り返ってみれば、自壊した政党政治とその後続く翼賛体制のもとで戦われたのは、対日経済封鎖網の圧迫打破等の意図があったにしろ、アジア地域への侵略的行為であったに違いない。

戦争に地図等は不可欠なものとして、当然に各国ともこれらを含む情報戦には力を注いだが、わが国のそれは侵略の先兵であったのか。不戦決議の問題を引くまでもなく、大変に重い命題である。

本誌でも、この戦後50年の8月にあたって特集を組むことになった。筆者の担当が戦中、次の清水靖夫氏が戦後の復興期における地図事情。最後の西尾元充氏が、戦中から現代までの、写真偵察から衛星リモートセンシングに続く時代を生きたれた貴重な経験を述べられる。

地図の全盛期

第一次大戦後の戦争景気から昭和初期にかけての一時期、大正デモクラシーの風潮のなかで、「大衆文化」の発展とともに、観光旅行や登山が大衆のものとなり、地図への需要も一気に高まった。民間での地図出版もおいおい盛んとなり、陸地測量部の5万分1地形図は大正13（1924）年までに、一部離島を除く全国が作成されて、戦前における地図の全盛期を迎えた。当時、1万分1から250万分1までの各種縮尺の地図に加えて、特殊図と言われる都市近郊図（集成図）、山岳図、スキー用図のほか、演習場図、各種

の図式、成果表等まで広く一般に販売された。特殊図には、当時の開けゆく時代の雰囲気を感じさせるものがあり、なかでも、御大禮記念の京都近郊図のように、左近の桜右近の橘に頌歌の声聞くような典雅な表紙絵（本誌218号参照）のものなど、一時の夢まぼろしであった。

描き変えられ始めた地図

しかし、大恐慌が暗い時代の幕開けを告げ、都市部での不況・失業増加と農村の疲弊がつづく中、昭和11（1936）年の二二六事件、翌年の盧溝橋事件に発する日中全面戦争（支那事変）下での統制経済と「贅沢は敵だ」とする風潮、国家総動員体制と、いつ果てるとも知れぬ戦争のなかでは、観光などは思いもよらぬこととなり、地図もまた秘密の壁に包まれ始めた。

これに先立つ以前から、要塞地帯については地図は一般には発行されていなかったが、さらに12年改正の軍機保護法によって、「陸軍大臣又ハ海軍大臣ハ防空其ノ他國土防衛ノ為軍事上ノ秘密保護ノ必要アルトキハ區域ヲ定メテ」飛行、高所より

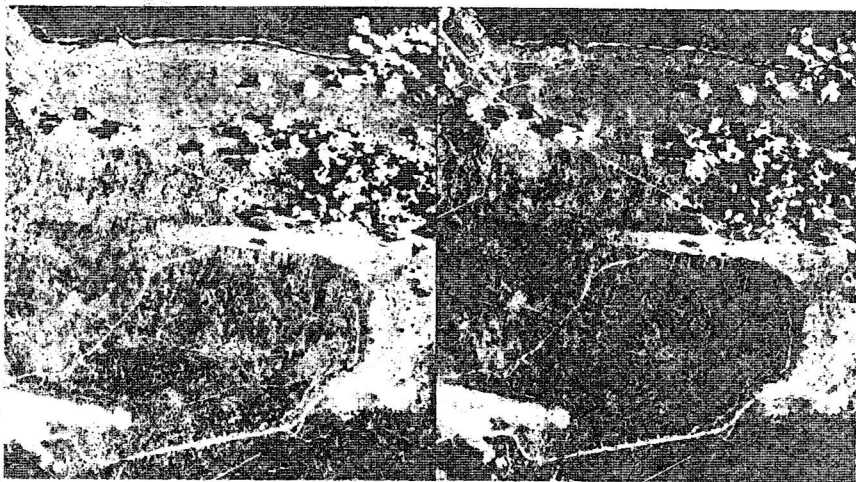


図1 米軍上陸前の、爆煙あがる硫黄島南東海岸（疑似実体視可能）。一帯には整備陣地が造られていたはずで、全面に無数に見える斑点（穴）は爆弾炸裂跡。当時の在島日本軍等2万人余は、20年3月に玉砕。米軍撮影（恐らく2月）、米国立公文書館（National Archives and Records Administration, Washington D.C.）より入手。



図2 地形図の隠蔽白ヌキ部分の拡大と改描、1万分1地形図「日本橋」、陸地測量部。左より、明42測・同43発行、大5修・同6発行、昭12修・同16発行、当初の図に比べて皇居全域が白ヌキとなり、さらに近衛師団等の軍施設が空白地として表現される。70%に縮小。

の撮影、測量等を禁止又は制限できることとなったほか、北方地域や島嶼・海峡部、要塞地帯については地図等の図書物件が公けにできなくなった。これを受けて、一部地域については、軍関係と重要施設をすべて除いたうえに山地もぼかした「交通図」(図3)が発行された。この頃には、民間製の地図においても、「〇〇要塞司令官御検閲済」とするなど、自主規制が始まった。

また、この措置後にも発行できた地域の地図で

は、皇室関係地区についての従前からの白ヌキに加えて、陸海軍関係の総てのほか、飛行場、造船所等が「国土防衛上ノ地図改描ニ伴ヒ削除」され、工場、発電所、電力線、高層建築物等も「所要ニ應ジ削除」された。これらの戦時改描版は、一瞥しても何かあると判るような、おぞましい地図(図2)として今日に残されている。さらに、16年以降は、200万分1以下の小縮尺図を除いて地図の自由な販売が逐次停止された(同年10月15日・

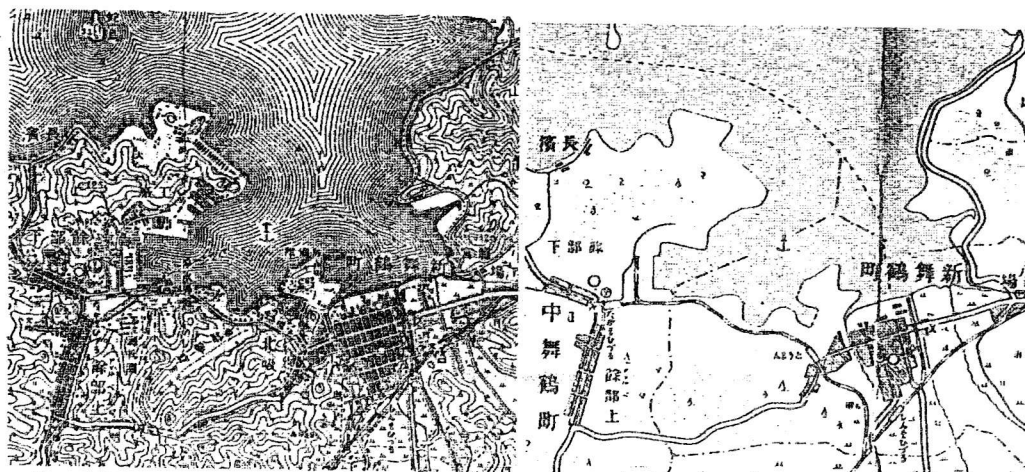


図3 舞鶴軍港周辺の交通図、左は5万分1地形図「舞鶴」(陸地測量部、明26測・昭2鉄補・秘図)、右は同交通図「舞鶴」(昭11製版・発行)。いかにものどかな港町に見えるが、それにしては鉄道支線が多いのが不自然。ともに90%に縮小。

翌年8月28日付け官報ほか)。

つまりところ、かつては一般に販売していた地図に次々に策を弄して、国民に不自由を強いる結果となった。一方の米軍では、入手済の日本の地形図を利用したが、19年にB29爆撃機が日本上空を自由に飛行できる(高射砲と迎撃機の到達高度以上)ようになって以降は、情報入手に何の問題もなくなった。米軍による地図作成が本格化するのは、戦後であるが、図4にその一例を示す。

図1は、戦地での空中写真の一例である。

国外国内の惨、情報非活用と情報断絶の悲劇

昭和に入って、地図作成の主力はいわゆる外邦地域と戦地に向けられ、膨大な数の外邦図が作られた。しかし、これらの地図は、「軍事機密」扱いとされて、本来の意図とは裏腹に作成そのものが目的化してしまい、余り使われはしなかったようである⁵⁾。

一例をあげれば、上陸した3万人余の2/3が還らぬ人となったガダルカナル島での、「海図により(陸上山岳地帯の)迂回路を研究するに…比較的容易に且つ敵飛行場の直前に進出」し得るとして、奇襲のために地形錯雑峻険な人跡未踏の熱帯密林に踏み込んだ例。日本軍による偵察空中写真が現地司令部に届いていたにもかかわらずである⁶⁾。あるいは、ニューギニア島の標高4000mに達する密林を補給もなく徒歩で越えようとして惨憺たる結末となったポートモレスビー作戦や、ヒマラヤに連なる重畳たる山岳地帯と大河を超えてアッサムへ

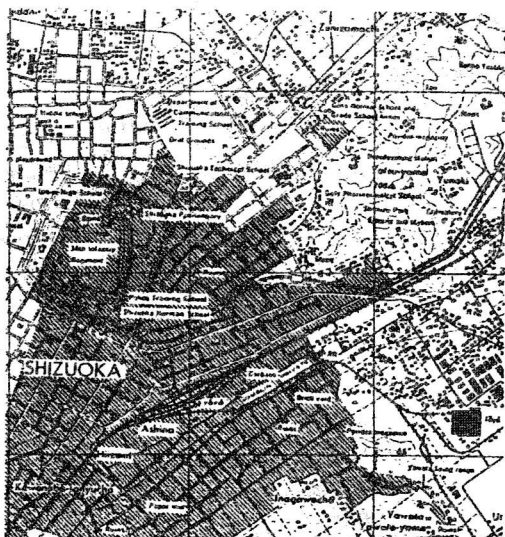


図4 米軍地形図に見るRuinsの表現。1:25000 "SHIZUOKA NE" (AMS, 1951)、Ruinsの表示部が空襲焼失域。桃色部が残存市街地。70%に縮小。

の進攻を目指し、雨季入り後の退却路は白骨街道とまで言われたインパール作戦など、ともに地形図があったにもかかわらず⁷⁾、これを活用するすべがあれば、地形的至難さのゆえにこの種の作戦企画は思いもよらぬことではと、今にして思われる。科学的戦略の思考欠除に起因する悲劇の例は、枚挙にいとまがない。

柔軟性に欠く命令至上主義とともに、地図作成のみが目的化してしまっていた悲劇を、南方での野戦測量の思い出の記から引用すると、「…たった1人で測板を担いで、…木もない草原の丘で、頭



図5 米軍写真に見る東京空襲の状況、写真中央が千代田。左は、市街中心の3月10日空襲後だが、この辺りでは写真右に僅かに焼け跡が達しているのみ、帯状の空地は防火のための強制疎開跡。右は5月25日空襲後で、この付近はほぼ焼失(暗色部が残存市街地)。米軍撮影(4月2日と5月28日)、米国国立公文書館より入手。紙上での縮尺約2.3万倍1。

と測板上をボサで隠して銃撃から逃れ、敵機が去るとまた測量を続行し、…敵が目前に来ているというのに何のために測量作業をするのか、…阿呆のように測板を担いでウロウロしていたのですから、命懸けの笑えない悲劇です。」¹⁾

ふりかえって、国内では、昭和19年夏のサイパン島失陥の前後から空襲が本格化した。翌年3月10日の東京大空襲（死者約10万人）以降は、それまでの軍関連施設への高高度精密爆撃に代って、都市への夜間の無差別焼夷弾絨毯爆撃となった。空襲は繰返され、5月25日にはそれまで被害を受けていなかった残存地区に対するとどめともいえる夜間大空襲で、東京の主要部はほぼ壊滅した。広島・長崎の原爆は言わずもがな。ほかに、各地の小都市に至るまで、8月15日の払暁に至るまで、轟潰しともいえる空襲が繰返された。図5に東京の状況を示す。なお、日中戦争（支那事変）中に、日本軍による重慶への無差別爆撃等によって、甚大な被害があった²⁾ことも忘れてはならない。

戦争は、国家総力戦としての長期展望もないままに、欧州戦線でのドイツの必勝を信じ、空虚な理念と無責任な美辞麗句をかざしつつ、国力を無視して対米英戦に突入する形となったが、そのことは政・戦略情報収集の欠如と悲惨な帰結を暗示するものであった。国家としての情報機関はなく、そのための人材養成も考慮されず、国策や重要な作戦のための情勢判断では概ね時期を逸しつづけ

た。要するに、この戦争は、情報を軽視した日本が、「敵を知らず己れを知らず」して突入したもので³⁾、その帰趨は初めから明らかであった。そのことは、ここで述べてきた戦中の地図等に関する事情の一端からも伺い得る。

廃虚からの復興に向けて

連合国軍による日本占領の後、米軍により全国土の空中写真撮影（4万分1、平野部は1万分1）が進められた。撮影は、戦中の戦略爆撃の頃から、偵察および爆撃効果評価のため繰返されていたが、これらは米国国立公文書館に保管されている。戦後分は、撮影コースが太平洋から日本海まで抜けるような、今日でも実施し得ない規模で行われ、戦災復興用等として日本に供与されて、今日まで、国土の大規模改変前の状況を知る貴重な資料として活用されている。なお、わが国による撮影としては、戦前の昭和10年代の陸軍によるものが断片的に残されている。図6はそれらの対比である。

【参考文献】

- 1) 朝日新聞社編(1983):『日本大空襲』、201p.、原書房。
- 2) 杉田一夫(1988):『情報なき戦争指導』、412p.、原書房。
- 3) 清水靖夫ほかの諸論文(1988):『地図情報、特集 戦前の地図・戦後の地図』、38p.
- 4) 陸測第五十期会編著(1990):『想—陸測第五十期生徒之記録』、441p.、私家版。
- 5) 長岡正利(1993):『陸地測量部外邦図作成の記録』、地図、31(4)、12-25。
- 6) NHK取材班編(1993):『ドキュメント太平洋戦争』全6巻。

(一部地図の掲載については清水靖夫氏の、米国国立公文書館の写真の調査は Kimoto Tech, Inc.・NJ のご尽力による)

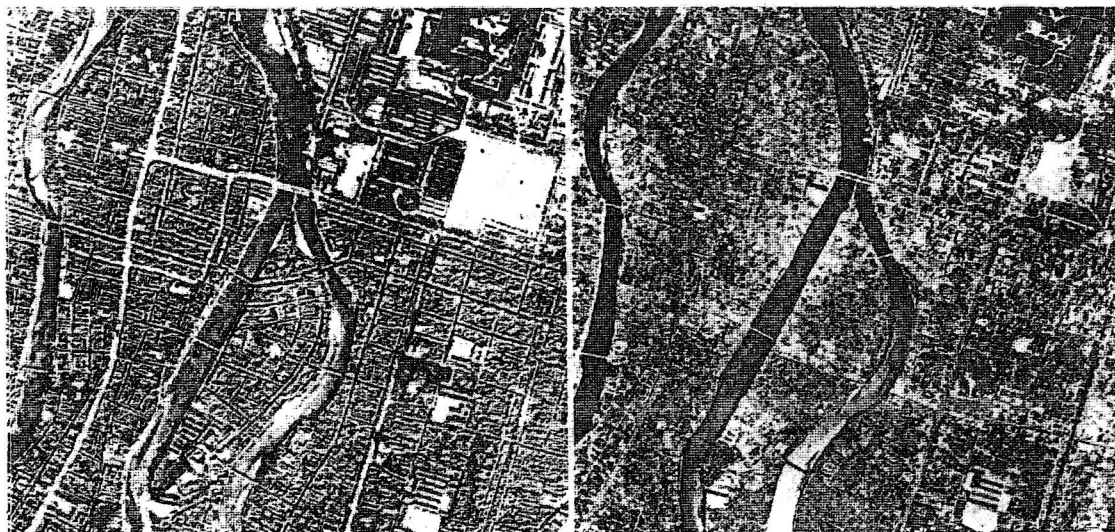
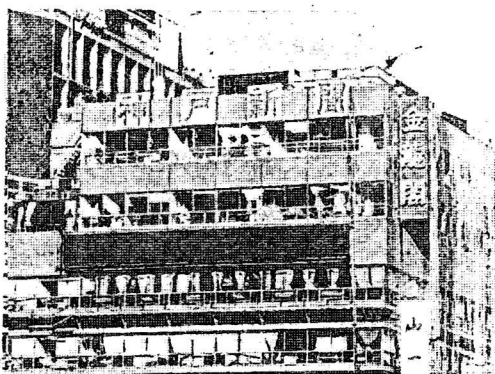


図6 日本陸軍と米軍の写真に見る戦前戦後の比較、広島市。

左は、日本陸軍昭和14年12月10日撮影、通りに面した密集民家が規則的な模様を見せる市街地、右上は広島城と第5師団の施設、右は、米軍22年4月14日撮影、太田川分流量南が爆心地、焦土と化した地に僅かに家が建ち始めている。紙上での縮尺約2万分1。ともに旧日本地図センターで入手可。

神戸大震災レポート

—神戸新聞社緊急システム構築を通じて—



神戸新聞新聞会館(写真:神戸新聞社提供)

(はじめに)

「ゴゴー」「ドッスン」という音で体が大きく揺れ目が覚めた。「地震だ」と思うと共に跳ね起き「大丈夫か」と子供たちに声をかけた。全くの暗闇の中、懐中電灯を探し出しラジオをつける。「神戸市を中心に大規模な地震発生」と、アナウンサーの興奮した声が聞こえた。これが、今回の私の「神戸新聞緊急システム構築作業」の始まりであった。

各社に状況を確認するために、公衆電話に何度も並び直し、神戸新聞社以外はほぼ大丈夫だと知る。神戸新聞社と連絡が取れない。テレビが何とか1局だけ見られる様になったのが午後。次々と被害の状況が写し出されている。「行くしかないか」背広に着替え、泣く妻を無理やり運転手に、とにかく三宮まで行くことにした。

三宮の新聞会館は、東側の窓ガラスは全て壊れ落ち無残な状態だったが、建っていた。

真っ暗な中、新聞社の人の先導で壁の崩れ落ちた階段を3階まで上がった。蠟燭を囲んで編集局の人達数人がおられた。佐藤編集局次長殿が私を見つけ、「システムは大丈夫か、とにかく電算室とLDPを見てほしい」と第一声。CPU室の天井が半分落ちかけ、耐震をしていないパイロット機器やMTロッカーが斜めに倒れたり大きく横にずれていた。LDPは意外と整然とそこに有った。

「当分は無理か」とやや諦めながら、とにかく西

(緊急システム構築ドキュメント)

- 1/17 阪神大震災発生(5:46)
「神戸新聞地震対策本部」発足
→新聞社より10日で立ち上げ依頼あり
- 1/20 緊急第一次システム順次搬入開始
- 1/21 CE、SE現地到着(約50名)
- 1/23 システム構築開始(オンライン立ち上げ)
- 1/24 動作確認、システムテスト
- 1/25 緊急第一次システム顧客渡し
- 1/26 顧客運用訓練
- 1/27 緊急第一次システム本番稼動(10日目)
・2ヶ面製作から順次移行開始
- 2/1 富士通関沢社長、秋草専務訪問
- 2/5 全ニュース面復活(カラー面も復活)
- 2/14 デイリースポーツ自社制作開始
- 3/6 全ての面が自社制作となる

神印刷センターにシステム部の林局次長殿に会いに行った。思いのほか広々としたセンターは騒然とした中にも、一種落ちついた雰囲気があり、てきぱきと色々な指令が飛んでいた。「さて、システムをどうしよう」「何日で立ち上げられるか」「電源はどのくらい必要か」「スペースはどうか」「回線数は」「空調の能力は」「CVCFをどうする」等々…ゼロからのスタートであった。

(K.U)

宇野 潔氏のこと

戦後50年は、阪神大震災で明けました。その後はオウム、円高、金融機関の倒産など話題に事欠きませんでした。後者群が腹立たしい人災であったのに比べ、震災の方は胸塞がれると同時に人間の崇高さにも打たれ、戦後50年を支えたものを改めて思い知る心地がします。

15期同期会時の近況報告中のひとくさりを編集長は聞きのがしませんでした。

「この間は 娘と嫁さんで逃げてしもうてからにー。そんなエピソードがあったんなら書くまっし。」

数日後

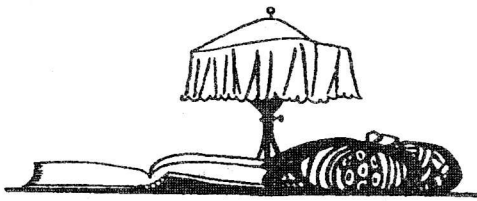
「やっぱり書かんなんけ？」

「わて、待っとるんやで。ええか？わてはく昔が懐かしい>たら、く仕方なく流されております>たら原稿のために時間を割きたくはないねん。くどう生きたか>くどう生きようとしてるか>がテーマねん。それにな。あんたはんが薦めたから、わては東京のボンボンにもうちの人にもDESK POWER Cを買ってやったんやで。責任とりなはれ！」

かくして、宇野氏は原稿を速達で送るはめになった。猶、彼女はダイエーで購入したのであって、氏の懐とは何の関係もない。（「責任とって！」で男が理性を失うことは、この件でも証明された）

惨状を目のあたりにした彼が、前回の原稿募集の際に、このエピソードを書けなかった心情はご理解下さい。

あらためて、被災者の方々のご冥福と、復興をお祈り申し上げます。



15期 宇野 潔

本日（11月20日）、1冊の本が発売されました。「神戸新聞の100日－阪神大震災、地域ジャーナリズムの戦い」（プレジデント社；1600円）＝本社崩壊、コンピューターシステムのダウン。大災害の中で1300人の社員はいかに新聞を発行し続けたか＝です。
興味のある方は、是非一読して下さい。

平成7年1月21日。快晴。

私はヘルメットを被り軍手をして、窓ガラスが散乱した歩道に立ち、三の宮の神戸新聞本社を見上げていた。

近くには、機材を運び出す為のクレーン車が2台、壁ぎりぎりに寄り、社屋突入の為の足場を確認していた。

<確認事項>

1. 突入時間は30分間とする事。
2. 最低必要とする物以外持ち出さない事。
3. 余震が来ればその場において動かない事。

私はコンピューターメーカーのSE（システムエンジニア）として、神戸新聞社の新聞製作システムを担当していた。震災当日（1月17日）に三宮の神戸新聞本社に駆けつけて以来、倒壊の危険の有る三宮本社から、西神印刷工場（神戸西区）で、コンピューターシステムの復旧作業に従事していた。

新聞の使命は「一日も欠かすことなく、読者に情報を伝える事」であり、それを支えるコンピューターシステムの壊滅的被害は、新聞社の存続をも危うくする。京都新聞社との提携により、神戸新聞は震災当日より数ページながらも新聞発行を続けていた。しかし京都新聞社での新聞発行には限界があり、一日も早いシステム復旧が、我々メーカーの使命となった。全国から必要機材を集めるにも限度があり、それらで震災前のシステム構成を確保するのは困難な状況であった。立ち入り禁止（倒壊の恐れ有り）に指定された三宮本社には、旧システムが「眠って」いる。

「使える物は全て運び出す。」との方針が出された。クレーンの使用許可を神戸市に取る手続きは、「神戸新聞社存亡の時」という理由で省略。決行は、まだ余震の不安が残る1月21日と決定した。しかし、自分の会社からは「危険な場所には一切近づかない事」の通達が出ている。一般社員を行かせることは出来ない。

「敢えて危険な場所に行くのだから、生命保険だって出ないかも…」

「会社が禁止している事をしに行くのだから、労災認定もむづかしいかな…」

「そこまでして、自分の会社でも無いのに、行かなければならないの？」

突入前夜、妻（17期）との会話である。

天気は快晴だが気温は低く、寒さと緊張で震えが止まらない。ビルに面した通りには救急車やパトカーが頻繁に往来しており、否応なしに緊張感が高まっていた。

10時突入開始。2階の窓へクレーン車から飛び移る。懐中電灯を片手に、3階のコンピューター室に急ぐ。剥げ落ちた瓦礫を踏みしめ、天井が落ちかかったコンピューター室に到着。耐震工事がされていない機器が横倒しになっていたが、意外と整然としていた。搬出の指示をしながら

<今、余震が来たらどうしよう>

という思いか頭をかすめる。

あっという間の30分が過ぎ、無事2階の進入地点に到着。クレーンに飛び移った時、正直言

って

<二度と行くのは止めよう>

と思った。

その後神戸新聞社の緊急コンピューターシステムは、50名以上のSEを投入し、震災後10日という異例の速さ（通常3ヶ月～半年間必要）で立ち上がり、神戸新聞の発行を可能にした。

「そこまでして、自分の会社でもないのに行かねばならないのか？」

「使命感」だと言えばカッコイイが…誰だって私の立場にあれば、行ったのではないだろう。上司からは「絶対に行くな」と言われながらも…。

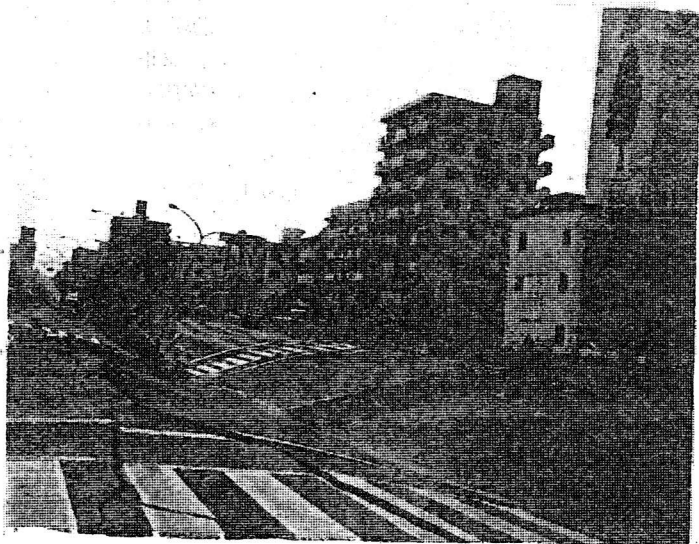
宣伝) 今回の私達の復旧作業に対し、神戸新聞社から「感謝状」と記念品を、そして社内では「システム本部長賞」を受賞しました。命と引き換えでは安いような気もしますが、それなりに充実した2ヶ月間であり、コンピューターから震災後初めて紙面が出てきた時の感動は、言葉に表せないものが有りました

あの悪夢のような大震災から10ヶ月が過ぎ、三宮の神戸新聞社は跡形も無くなりました（更地と化した）。JR三宮駅前にも震災前の賑わいが戻りつつあります。私も従来の作業形態に戻り、東に西に出張の日々を過ごしています。

今回の震災では大勢の方が亡くなり、死ぬ思いをした人々が多くおられる中、今回の投稿には心苦しいものがありました。編集長の「押し」に負けた形で筆を取りました。

追伸) 私が三宮の神戸新聞社に突入した事実は、会社の中では「無かった事」になっています。

以上



阪神・淡路大震災における神戸新聞社システムの復興

関西システム部・第三システム課

この度、F T Sが主体となった震災復興プロジェクトに対して、本部長賞を頂きました。そこで、その作業の中心となった関西システム部第三システム課長に現在の状況を交じえ、報告を頂きました。

あの悪夢のような大震災からはや10ヶ月が過ぎようとしています。

いまだ、4万8300戸の仮設住宅に被災者が住み、83ヶ所の公園や学校／区民センターに1,977人が避難生活を続けています。私が住む神戸市北区のマンションも未販売物件が全て被災者の賃貸住宅と化しました。J R三ノ宮駅界隈は、仮設テントの飲み屋ではあるものの、震災前の賑わいが戻りつつあります。

オウム騒動で忘れかけられた被災地神戸は、手塚治虫の「火の鳥」をシンボルマークと



建設中の神戸新聞社新社屋

した「フェニックス計画」が着実に進行しています。

我々がサポートする神戸新聞社殿の旧社屋（J R三ノ宮駅前）も完全に解体され跡形も有りません。又旧富士通神戸支店ビルも同じ運命をたどりしました。

しかし、三ノ宮から西へ2駅のJ R神戸駅近くのハーバーランドには、神戸新聞社の新社屋が急ピッチで建設が進められています。

又、震災以降神戸新聞社の拠点となった。西神印刷工場では、我々が構築したあの「緊急システム」が着実に成長し、「三ノ宮システム」以上の機能と能力を備え、日々「神戸新聞」と「デイリースポーツ」紙を読者に送り続けています。

震災後の神戸新聞社主催の慰労会では、富士通と共に、我がF T Sに対しても「感謝状」と記念

品を荒川社長より頂きました。その席で、荒川社長から「素早い復旧は新聞業界の驚異的であり、献身的な支援に心から感謝します。」とお言葉を頂き、関係した一人として感激したことを今でも思い出します。

神戸新聞西神戸印刷工場は、大阪から約2時間弱の距離にあり、最寄りの駅までは新聞社のマイクロスバスで往復します。現在フィールドS Eは加藤班長以下3名で震災時の喧噪は無いものの、システムのサポートに忙しい日々を過ごしています。

食事情は改善されたものの、仮設の食堂で食事を取り、相変わらずスーパーで買い込んできた食料がS E控え室に置いて有ります。

震災でのダメージは有ったものの、神戸新聞社は従来からの計画である「新社屋」への移転計画を着実に進めています。

当初の計画をわずか4ヶ月遅らしただけの、平成8年7月14日より、ハーバーランドの新社屋で紙面制作を開始し、9月22日には全面移行の計画となっています。

担当S Eはほっとしたのも束の間、この強引な計画に向かって今準備を始めています。一日も早い新社屋移転が神戸復興のシンボルとなるものと信じて今後も頑張ってサポートする所存です。

この「緊急システム」構築は、F T Sにおられた塚原部長を中心に、富士通情報出版システム統括部及び㈱タスク等の富士通新聞グループの総力を上げての対応が実を結んだものです。この対応に対し「本部長賞」を受賞出来たことは、我々の大きな誇りであり今後の新聞システム展開の励みにもなります。

賞金の15万円を受賞者一同有効に使い、当時の緊迫感を忘れず、やれば出来る（震災後、顧客からよく言われる）の精神で今後も活動します。

某部長の弁「震災がもう一度くれば、もっと上手くやるのに」、担当S E「いえいえ、1度だけでもう結構です……」。

以上

（これも宇野 潔氏 筆）

憧れの無人島

20期 久富 象二

能登半島の入口あたりの中島町に瀬嶺という町があるのをご存じだろうか。七尾湾につながる波の穏やかな入江に面した半農半漁の小さな町である。

この瀬嶺から船外機付きの船で約20分くらいの所に種ヶ島と机島と呼ばれる二つの小さな島があるのをご存じだろうか。万葉集にも登場し、また皇族のナントカ宮が孔雀（七面鳥であったか）の飼育の様子を観察に訪れたりした、それなりに由緒のある島である。が、様々な歴史と変遷を経て、現在はとにかく無人島である。

私が語りたいのは島の歴史や変遷ではなく、この二つの島のうち机島が、一時期私達の絶好のリゾート地であったことである。

話の発端は、我が社の労働組合の執行委員会が終わった後の飲み会である。同僚のM氏が語るには、中島の沖に無人島があって、そこに別荘があるというのだ。その別荘は東京在住のとある会社の社長の所有で、気の向いた時にフラッと来る。普段の管理は、瀬嶺に住むこれまた同僚のT氏が任されていて、社長が来る時以外は自由に使って一向構わないことになっている。その別荘は井戸を掘って水道が引かれていて、自家発電で電気も大丈夫だという。そこまで話を聞いて私は気持ちが昂るのを覚え、是か非でも行かねばならないと思った。

行動は素早かった。私は労組の執行委員を中心にメンバーを募った。曰く、

「無人島へ行こう！」



執行委員会の出口の見えない議論に飽きかけていた者には刺激的であつたらしい。メンバーの合意はすぐに形成された。日程表と食料計画を作りファックスで流した。準備はさしたる苦勞もなく整った。出発したのは快晴の夏の日。そう、あわもり喬が参議院選に当選した、それなりに意味のある夏だった。

瀬嶺へ向かう途中、七尾のスーパーで食料の買い出しをした。10数名分の食料の買い出し表を手渡し、買い漏れをチェックする私の手際は仲間から、「さすがワンゲル。」とお誉めをいただいた。

T氏の船で島へ向かった。波しぶきが心地良かった。島は周囲2kmくらいであろうか。ちゃんとした船着場があり、船着場から草地の傾斜を少し登った所に別荘はあった。別荘から荷物を運ぶための滑車が引かれ、台車がぶら下がっていた。

「別荘」といっても外観はごく普通の民家である。しかし、中に入ってみて驚いた。キッチン、ガスレンジあり。もちろん外にはプロパンガスのボンベが据えられている。大型冷蔵庫あり。中には日付不明のビール4、5本。ダイニングにテーブルあり。おフロあり。ポータブルテレビあり。七尾湾が目の前に広がる縁側あり。8畳間二つ。不自由する要素は何もない。テント生活を思えば豪華すぎる。

私達は、皿とコップを洗い、ビールを冷やし、床とテーブルを拭き、部屋を掃き、おフロを洗い、こまめに働いた。一通りの仕事を終えた後、七尾で仕入れたイカの刺身で乾杯した。

乾杯の後、船で釣りに出た。魚がいない筈はないのだが、私達に釣られる魚はいなかった。同志社で水泳をやっていた一人が、竿を放り出してフリチンで泳ぎだした。

釣りから帰ってご飯を炊いた。ガス炊飯器が備えてあったので、4年間ホエプスの飯炊きで鍛えた私のにかかれば、出来映えは完璧であった。カレーを作った。玉葱を充分炒め、にんにくを効かせ、トマトも入れた。角瓶をすすり、

持って行ったカセットでラリー・カールトーンを聴きながらじっくり煮込んだ。ラリー・カールトーンのギターには時を止める力がある、そう思ったりした。

夕食はカレーと定番、焼肉であった。予定では釣れた魚がどんと出る筈であったが、釣れなかったものはしかたがない。夜釣りにも出掛けしたがやはり釣果は今一つであった。だが、暗い海の向こうの和倉温泉の灯がきれいだった。

結局この無人島へは3回行った。執行部バンドを結成するのだと意気込んでギターを持ち込んだこともあったが、酒の酔いのせいかチューニングだけで疲れ果ててしまった。最後となったのは翌々年の1月であった。その後この無人島で2泊3日の「厳冬期合宿」を計画していたのであったがそれは不可能になった。もう無人島へは行けなくなってしまったのである。管理の仕事がT氏から別の人に移り、またT氏も地元へ進出してきた企業へ転職してしまったからである。私はT氏との関係が途切れてはならないと思い、年賀状やお歳暮を送ったりと努力はしたのであるが、結局は疎遠になってしまった。

この無人島に代わる場所をと2、3探してみたり、実際に行ってみたりしたが、いずれも無人島ほど気持ちの昂りを感じさせてくれる所はなかった。いっそのこと、あの無人島を買おうかと同僚達と相談したことがある。1坪500円として……。無理なのである。買える筈がない。定年まで払い続けてまだ残高の残る住宅ローンを抱えていて、そんなお金どこから出せるものか。

電気もつくし、水も出るし、おまけにタヌキまで出る。

でも簡単には行けなくて、もし海が荒れたら何日も帰れない。

また行きたい。ああ、憧れの無人島！



<解説>

ワングルOB会報初の文芸(?)作品は以下の経緯で掲載された。この経緯を知るか知らぬかで、この作品の理解は異なってくるものと思われる。(この解説が「いじっかしい」人は素直に作品のみを味わって下さい。)

35周年記念誌の発行により、バラバラに見えたワングルの歴史は剥ぎあわせられ、経年変化を俯瞰できるようになった。

某女史は一応理学部出であり、生半可にかじったにもかかわらず、データーを見れば、解析・考察を試みずにはいられない。そして、彼女は「ワングルは何故衰退(部員減少)したのか」の疑問の答えを歴年のBH誌の記述の中に見出だそうとした。20期をピークに「減少」は始まっている。3Kを嫌う傾向が増したにせよ、何か重大事故が起きたのか(否。事故は却って部員の結束を強める)、著しくワングルの品位を貶めた人物がいたのか……思い当たったのは、この頃、執行部の任期が変更となったことであった。

おりしも、役員会には20期久富氏がおり、彼女は「生き証人」である久富氏にカマをかけてみたのである。人を疑うことを知らぬ彼は、「何年か前、飲み会の帰りに、ばったり前田先生にお会いしたんですよ。」

<この頃ワングルはどんな具合ですか?>

と聞くと、「減りっぱなし」という返事。

そして

<あんたらのせいや。あんたらがシステムを変えたから、上級生が出てこんようになって、活力がなくなってしまったんや。>

とわれてしまって……

と、告白した。ひそかに気に病んだ彼は、そのために、中年太りと緑のない体になっていた。

「やっぱり！」

と女史はほくそえむ。有力な証拠を得た彼女は「4回生を役職から外した結果、4回生が出て来辛くなり、それが、我関せずの風潮を助長したのであろう。しいては部の伝統が伝わらなくなり、魅力も損なっていったのだワ！」

と勝ち誇る。その後彼はくウォー、組織なんて…もう嫌ダ！>とストイックなマラソンにのめりこんでいったようだった。

この論戦は、ご多忙の久富氏、一応主婦の女史ということで一向に展開せず、「月見の宴」に持ち越されていた。

しかし…ワンゲルの「聖域」BHにあっては、いかなる不協和音もかき消されてしまう。同じ時代を共有したことの無い兩人であったが、双方ワンゲルの美酒に酔いしれてしまった。しかも彼の作るBH横の沢水による水割は、絶品なのであった。「和解」の道しかそこには残されていなかった。

「その時には、自分達が画期的と思ってやったことが、実は時代の大きな流れの中での必然的な変化だったのだ。自分達がやらなくても、次の何期かにはやられていたに違いない。もし思いつきに過ぎないことであれば、次にはゆり戻されているはずなのだ。その時には極端で、歴史がとげとげに角張ってつながっているように思えても、実は否応無しの変化の中にワンゲルも変化し続けているのだ」

「ではワンゲルとは何だったのだろうか？」
そこへさらに論客が加わり、酔うほどに、過去のあの時のこだわり、あの時口には出せず、ただ見守るしかなかった思いなども暴露されて、皆もう、ワンゲルを選んでよかったという思いで一杯になってしまった。

「ワンゲルとは、自然を愛すはもちろんだけど、その前に<人を愛し>が入るんですよ」

「異議無し！」

で、その夜は暮れてしまった。



しかし女史は執拗であった。彼女の頭には、すでに四十周年があり、丁度真中の期にあたる久富氏は、基調演説をさせるに格好の人材に思われるのであった。

もう解決済と思っていた彼は、原稿依頼に驚きながらも、書かねば女史からは「解放されない」とここに観念した。持久戦に持ち込んでも体力負けすることは明らかなのであった…。

予告どおり期待を裏切らず、遅くなりました。すみません。

原稿の内容ですが、月見の宴については沢山の方が感想を寄せて下さるでしょうし、クラブのシステムを変えた云々については次の理由でパスさせていただきました。

・僕達が現在のシステムにしたのは、クラブの活動のメインは合宿であり（特に夏）、そのリーダーをやるのは3年生である。活動の中心を担うのが3年生であるのに、方針を決める執行部を4年生が務めるというのは構造的に不都合だ、というような理由からだったと思います。

この理由は是非はともかく、僕らは僕らなりの議論をしてそれまでのシステムに弊害を感じシステムを変えたのだから、現役の方達も現役のシステムに弊害を見出しているのなら、それは手順を踏んで変えていけばよいのであって、今僕が現役の方達に対して論じることがほとんど無いように思われます。

・現役の方達には、不都合を排し、自分達の思うような形にクラブを変えていかれることを願っています。僕達もそうしてきたのだし、先輩方もそうしてきたことと思っています。

それで、原稿は今一番書きたかったことを書かせていただきました。OB会報に相応しいかどうか、読んでいただいて、分かる方には分かるだろうと思いますが、如何か。

帰省中、千葉の
会社員が水死
立田村の木曾川
十二日午後三時十分こ
ろ、愛知県海部郡立田村福
原の木曾川（川幅三百三十
びで、千葉県我孫子市つ
くし野四、会社員、横井昭
次さん）が、右岸から六
十びの深みにはまっておぼ
れた。約三十分後に水際一
・八びの水底に沈んでいる
のが見つかったが、間もな
く死亡した。死因は水死。
津島署の調べでは、横井
さんは五日から、家族五人
で同郡佐屋町の奥家へ帰省
中。この日は友人の家族ら
と計十一人で川遊びをして
いた。横井さんは正午ごろ
から、右岸から八十び離れ
た中州で、二女さんと友人

の長女さんの三人で遊んで
いたが、潮の變化で水位が
増して危なくなり、友人に
子ども二人を預けて自分も
岸に戻る途中、行方が分か
らなくなった。

新聞【8月13日】

横井 昭次さん水死

横井 昭次さん（15期）は8月12日ふるさとの木曾川で不慮の死を遂げられました。

それはお盆の帰省中のことで、アドレス帳が手元にない状態のため、友人関係への連絡が不可能でした。たまたま翌13日の朝刊で記事を見た16期川端さんより、15期佐野さんへ連絡が入り、緊急連絡が回ったものです。お盆時で連絡に手間取りましたが、15期を中心にワンゲルOBが参列し、彼の柩を送り出すことができました。

その後15期連絡員の坂尻さんがよびかけ、追悼文集を作成することになり、彼の尽力で完成。夫人の裕子さんにお届けすることができました。

緊急連絡にあたった佐野さんからも、名古屋での新聞コピーが送られ、葬儀の時の模様が伝えられました。

横井さんは、前回の同期会の幹事を務めており、その下見の時に木曾川を渡りながら「この川は、僕が小さい頃から泳いで親しんできた川なんだよ」と語っていたことも、今では辛過ぎる思い出になってしまいました。

追悼文集の彼の死を悼む名文の数々は、皆掲載したい所でしたが、会報掲載期が偏ることを編集長は気にしており、割愛することにしました。

*横井さんのBH13号掲載文

*横井 裕子さんからのお便り

（10月15日付け 掲載をご了承いただきました）

*横井 裕子さんへの応援会（白山会）を結成

の以上3点を紹介します。あらためて横井さんのご冥福をお祈りします。



死に寄せて

15期 横井 昭次
（BH13号より）

月日の流れて行くのは、真に速い。人が去ってからの時間は、更にまた速く流れていた。それは、その人の死があまりの突然であったからか、あるいは彼が私と深く関わっていなかったからか。〈彼〉と呼んでしまったのでは、いよいよ遠ざかってしまう様な気がする。せめて〈奴〉と呼ぶことにする。そうする事が、やがて私の記憶から消えてしまうであろうかもしれない死んでしまった奴と、いまだに生きている私の仲をつなごうと思う。それは所詮、死んでしまった奴と、生きている私とのあまりの隔たりに対する、生きている私の側からの後ろめたさの表われであり、又、一つの「事件」に関わっ

たということから来る、いささかの昂りを感
じた私の後ろめたさの表れである。

こんな話を耳にしたことがある。自分の家の
隣に盗人が入った時、彼にとって、その盗人へ
の恐れ、あるいは憤りよりも、自分の生活圏内
の中に、自分の身近に、盗人という<異常なも
の>が割り込んできたという事の方が、より関
心を抱かしめるであろうという事を。隣の家に
盗人が入ったという事が、彼にとっては、一つ
の自慢話の様にして語られる事であろう。それ
と全く同じ心の昂りが、一人の人間の死という、
あまりに<異常なもの>が私の眼の前で起こっ
て以後、私の心の中にあった事を懺悔しなけれ
ばならない。あまりにも異常なもの=死が、こ
の私と関わりを持ち、（それは皮相的なもので
しかなく、いか程に私が一人の人間の死に関わ
り得たか。やはり「死」が「事件」でしかなか
った）しかもその関わり、この私が独占した事
（私は彼と同じパーティーのメンバーであり、
更に、彼が単なる物質と化していく様を最後まで
見続けねばならなかった。）を。やはり、「
自慢の種」として心の中に丸め込んでしまって
居たのである。そうであった私にとっては、あ
の地で黙禱を捧げる事も、花を献げる事も、そ
れが私以外の人によって成された場合、しらじ
らしく私は思っていた。私は恥ずかしい。私は、
祈るよりも、祈りを捧げている者達の心の中を
探る事に忙しかった。そして一方、自分にとっ
てもまた、私以外の人にとってと同様に、死ん
だ奴が遠い存在である事が解れば解る程に、即
ち、この私が私以外の人間と同じであるという
事が解れば解る程に、私と私以外の人間との差、
それは私が独占し得た彼の死ぬとのより深い関
わり（それは、彼の死をまのあたりに見たとい
う事だけなのだが。）なのだが、それが私にと
ってはいよいよ大事なものになってしまった。私
は私以外の人間と同じになってしまう事を恐レ
た。

私は誰に対しても恥ずかしい人間でした。

四月X日

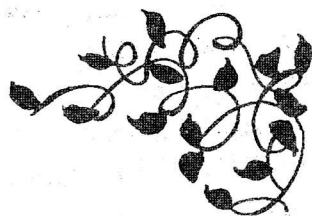
先日の山小屋作業（高三郎田道整備）の時に、
一年前の新トレで桂君と並んで座った地点に腰
をおろした。あの時彼は元気な様に見えたのだ
が、あそこで我々は、あの時レーズンを口にし
た様に思う。本当に苦しさを分け合った仲間同
士だったのに。彼の葬儀が終わった後で、ダム
の傍らの桂君が倒れた所にご両親と妹さんが行
かれた時、お母さんと妹さんが泣きながら、そ
の場の花を摘んで手に固く握られたのが忘れら
れない。

十一月Y日

僕は初めて知った。遠くから冷たい言葉でも
って、一人の人間の死を見ていた人の中に、執
念深い悲しみがあったことを。僕のヒステリッ
クなセンチメンタリズムは、必死になって己の
感情をかきたてようとあかいている、愚かな傍
観者のものだったのです。残されたお母さんの
慟哭に、思わず涙を禁じ得なかった。その心に
嘘などはなかったが、その感情の隙間に、すぐ
いとわしい想念が知らず知らず頭をもたげてし
まっていたのです。

僕の中で桂君の面影が薄れていくだけでなく、
彼の死そのものがまさしく風化していく時、僕
は一人の人間の死を今なお、執拗に心の中に背
負い続けて居る人を見たのです。

十二月七日



横井 裕子さんからの郵便

（10月15日のもの）

いつのまにかすっかり周囲は秋になり、コス
モスは満開になり、外ではいろいろな虫の音が
聞こえています。あの暑かった夏がどんどん遠
ざかっていきます。

追悼文集をお送りいただきましてありがとうございました。丁度2ヶ月目の10月12日に届きました。主人の写真の前で読ませていただきましたが、皆様のお気持ちがうれしくて涙が止まりませんでした。翌日、眼と鼻がズキズキ痛むほど泣いてしまいました。

通夜、葬儀ともに、突然の知らせだったにも関わらず、大勢で来ていただいて、本当にうれしかったです。でもあの時は、自分が自分でないような状態でしたので、皆様とどんなふうにお話したのかさえよく覚えておりません。あの後27日忌が過ぎるまで佐屋にとどまり、我孫子へ戻ってからは、又、たくさんの方々にお別れをいただき、49日忌を過ぎるまではただただ毎日を過ごすのが、やっとという感じでした。

ようやく最近になって、まわりはすっかり秋になり、言葉では表せないような淋しさに取り囲まれているのに気がつきました。誰かと話をする時に悲しくても、笑顔でつい元気そうにしてしまう自分がイヤでしたが、ようやく素直に涙が出るようになりました。今までで一番悲しくて泣き虫になっています。子供達の前では泣かないようにしていますが、いつもそばにくっついてくる三女にはすぐ見つかってしまって困っています。

もし、私が一人きりだったら、きっと一日中何もせずにただぼんやりとするばかりだったかもしれません。子供達がいるから早起きして、ごはんもお弁当も作るし、掃除もする。運動会ではカメラを持って走り回り、幼稚園のお誕生会にはおしゃれをして出かけていく…。こうやって、時がどんどんたっていくのでしょうね。

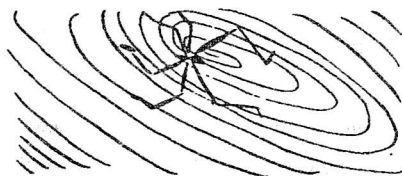
もう2ヶ月以上が過ぎたのに、まだ自分の中では主人の死を認めたくない気持ちで一杯です。どこかへ出張に行っているような気がします。それと同時に以前よりもそばにいたような気がします。帰りが遅くて、いつも夜中と朝しか一緒にいられなかったけれど、今はずっと一緒にいるように感じます。きっと皆さんからの文集も一緒に読んでくれたと思います。本当にありがとうございました。

8月12日のあの午後のことは思い出したくないことですが、坂尻さんをはじめ、ワンゲルの方への伝わり方は少し事実と違っているようなので、ここに訂正させていただいてもよろしいでしょうか。あの瞬間を目撃したものはごく僅かですので、本当のことは私にもわかりませんが、皆様にはなるべく事実に近い事を知っていただきたいのです。

新聞の記事にも、中洲にいたのは3人とありますが、本当は、友人の長男、長女、我が家の長女、次女の5人で泳いでいました。私と友人は川岸に近い所でお互いの末っ子を遊ばせていました。その日は久しぶりに再会した友人一家と話がはずみ、楽しくて楽しくて時がたつのも忘れていたほどでした。でも、ふと時計を見ると、もう午後3時を過ぎており、もうそろそろ帰ろうと主人に声をかけました。

「もうあがるよ」

という主人の声に安心して、私と友人は岸に上がりました。私がふりむいた時、主人の頭のまわりに4人の子供達の頭が集まっているのが小さく見えたので、そのあとすぐ来ると思っていました。たぶん、そのすぐ後に事件はおきたのだと思います。



友人の長女と我が家の次女は少ししか泳げないため、深い^所を渡る時は主人が2人を抱きかかえていました。その時もそうしていたようです。ところが、行きと違う所を渡ろうとしたその場所が、主人でも背が立たないほどの深さだったようです。主人一人なら決して溺れません。しかし、両腕に子供がしがみついた状態で足もつかず、本人はどんなに必死だったろうと思うと、こちらまで胸が苦しくなります。そんな状態だったのに、主人はあわてている友人の長男に「おじさんの腕につかまれ！」と叫んだそうです。でも、その子は主人がそん

な余裕はないことがわかっており、我が家の長女と必死に泳いで岸についたのです。

主人は、近くの人か抱えている子供達を受け取ってくれた後、力尽きてもぐってしまったようです。長女が大声で

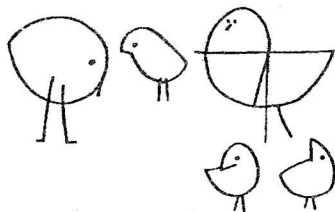
「助けてえ。お父さんがもぐっちゃった。死んじゃう！」

と走ってきた声を聞いて、私達が走って行った時には、もう主人の姿はどこにもありませんでした。3人の子供達が泣きながらそこにいるだけでした。つまり、主人の最期は子供達だけが見ているのです。特に2女は、その様子をまのあたりにしているのです。最後にお父さんは何と言ったのか、どうしてまわりに助けを求めなかったのか、どんな風に沈んでしまったのか――私には知りたい事ばかりです。でも、あまりに現実過ぎて、いまだにあの時の詳しい状況は聞

けないままです。子供達があの日ボツボツと話した事だけをつなぎあわせて、私が想像したにすぎません。いつの日か、娘が自分から話した時に聞いてみようと思っています。

もしかしたら、5人の葬式になっていたかもしれない事故でした。必死に、文字通り命をかけて、主人は子供達を助けてくれました。子供好きな主人らしい最期だったのかもしれない。

助かった大切な命を、今度は私が育てていかなくてはと思っています。くじけてはいられないと思います。「白山会」の皆様が応援して下さい。どうぞ15期会をはじめワングルのお友達によりくお伝え下さい。本当に心の中は感謝の気持ちで一杯です。文集は私の宝物にさせていただきます。



よびかけ

故横井昭次君遺児への励まし基金について

あの横井昭次君が、去る8月12日15時30分頃帰らぬ人となりました。

突然の訃報で、残された妻裕子さんや、美奈子ちゃん（10歳）、志穂子ちゃん（8歳）
悠希子ちゃん（5歳）に慰めの言葉も有りません。

横井君の無念を思うとき、万感迫るものがあります。

「おい、横井君！私達に何が出来来る？」と問いかけるとき、残された4人の名前を
大声で呼ぶ彼の姿が浮かんで来ます。

子供が大好きだった彼、飲みながらお子さんの事をよく聞かれました。

今、私達が出来る事。

せめて、生前横井君と関わりがあった私達が、「お父さんには、たくさんの友達がい
て、みんなが応援しているよ」と残された子供たちに、Sprecher.
(シュプレヒコール)を贈りたいと思います。

左記の要領でご賛同頂ける方を募ります。

記

（呼びかけ人）

童話作家

伊藤 喜郎

くもん出版

中城 正嘉

くもん出版

赤石 忍

公文教育研究会

久保 輝也

表現研究所

伊藤 安一

金大法文部

山下 義信

金大文学部

宇野 潔

（応援名簿）

応援名簿を作成します。

（励まし基金）

残されたご家族のこれからを思うとき、言葉によるなぐさ
めも大切ですが「実生活に少しでも役に立つこと」として、
私達の気持ちを応援金として贈呈したいと思います。

・1口 1,000円

（親しかった人 5口以上でお願い出来れば幸いです。）

・目標額 100万円

・応援金は、各呼びかけ人にお渡し願います。（又は、左記の口座）

・応援金振込口座「あさひ銀行蒲田支店 横井君応援金 宇野 潔

（ヨコイケンオウエンキン ウノ キヨシ）1060392

・募集期間は9月14日までとし、四十九日の9月24日には裕子さんに
渡したいと考えています。

・一人でも多くの方のご賛同が得られることを祈っています。

（文責 宇野 潔）

連日の猛暑にも朝夕の風を感じる今日この頃です。子供たちも2学期が始まります。

さて、突然の連絡ですが(15期は、周知の事実ですが)我々15期の横井昭次君が、去る8月12日15時30分頃、帰省中の名古屋で不慮の事故で帰らぬ人となりました。

妻裕子さんと、美奈子ちゃん(10歳)、志穂子ちゃん(8歳)、悠希子ちゃん(5歳)の3人の子供が、残されてしまいました。

我々15期にとっては、桂、高村、比田井(石田)に次ぐ計報であり、さみしさを通り越して、非常なショックとしか言いようがありません。

学生時代及び社会人になってからの15期会(ほぼ皆勤だったはず)と、思い出は尽き無いものがあります。

新トレでトップを歩きながら、後ろを振り返り、遅れ気味のメンバーを気づかいながら歩く横井。

あの白山の南竜で、時間を忘れて「星」を見ていた横井。

金も持たずに、後輩を引き連れて、兼六園下の飲み屋に繰り出した事もあった。

出版会社に勤めてからは、「こどもたち」の役に立つ本を目指して頑張っていた。

相手の話を、本当に一生懸命、聞いてくれた横井。

一人倍の「正義感」と「思いやり」で他人に接していた横井。

葬儀の後、美奈子ちゃんに「がんばって」と声をかけた時、「ありがとう」といきました。と健気に返事した姿が忘れられません。

子供が大好きだった横井。あとけない3人のお子さんを思う時、今後の人生に何か励みになる事をしてあげたい。

横井の無念さを、少しでも和らげることが出来たら。

そんな思いで応援名簿と応援金を募る事にしました。

彼にとって、金大ワンゲルの友達、かけがえのない仲間でした。

(手続)

・ 応援金を、銀行振込(別紙参照)か私(宇野)宛に送って下さい。

・ 応援金送付者名(関係、氏名)を記入した「応援名簿」を作成します。

・ 別紙にもある様に、9月14日迄にお願いします。

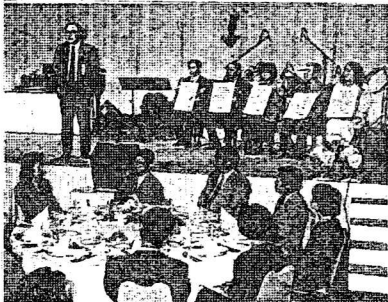
(15期へ)

・ 過去の2名(高村、石田)に対し今回の様な活動が出来ていないのに、横井の時だけと言う事になってしまいますが、あくまで会社を中心とした広い募集に参加するという形で了解願います。

以上

平成7年(1995年)9月3日

TOYP大賞受賞者の功労をたたえた表彰式 = 金沢市内のホテル



中村氏は20期。原稿依頼をしてありましたが...

陶芸の中村さんら表彰

JOC石川
ブロック協
TOYP大賞に5人

日本青年会議所石川ブロック協議会の「1995 TOYP大賞」(北国新聞社、北陸放送後援)の表彰式は、日金沢市の金沢全日空ホテルで行われ、出席者約四百人が、さきまな分野で活躍する石川県出身の男女五人の功労をたたえた。

TOYPは「The Outstanding Young Persons」(傑出した若者たちの意味)の頭文字を取って名付けられた。今回は陶芸家の中村元風さん(20期)、オペラ歌手の濱真奈美さん(21期)、環境保全に力を注いでいる二木太一さん(22期)、脚本家の水橋文美江さん(23期)、伝統的加賀野菜作りを取り組んでいる米林裕栄さん(24期)が受賞した。

授賞式では、小中出佳津(日本青年会議所石川ブロック協議会長)が「若者たちがそれぞれの個性を生かして役割を果たせば、石川の街は輝き出す。街の活性化を願う意味でも、このTOYP大賞を顕彰していきたい」とあいさつした。続いて山形県金沢大学長が十人の審査員を代表して講評し、若本副知事が祝辞を述べた。

中村元風さん(加賀市在住)は九谷焼陶芸作家。フーディアの食器を市で開く活動に尽力したほか、平成四年には、もしやん塾を開設し、石川県の国際化に努めた。

前略
秋風がこころ良く、野山に出かけたくなる今日この頃です。さて、週日(九月二十四日)に故横井昭次君の四十九日が、妻裕子さんとご家族の方、大分落ち着いた様子でした。当日、皆様の意向と裕子さんに伝えると共に、応援頂いた方々の横井君の思い入れ深い白山にちなみ「白山会」とし、その応援者名簿と手渡し応援金を裕子さんの口座に振り込んだ旨伝えました。

呼びかけに賛同頂いた方は、二百五十団体及び個人で、総額二百三十八万一千円となりました。これからのご家族の生活に少しでも役に立つと思えます。

金大ワンゲルOBでは、十三期から十七期まで五十一名の参加で五十八万円と目標額の半分以上の応援金が寄せられました。山の仲間の結束を再認識しました。

以上ご報告まで 十五期 宇野 潔

9 4 小屋作業報告

小屋作業CL 正善 久裕

大がかりなBH修復作業も、今年で3回目となりました。実に私達が丁度入学した年から始まったわけですが、今でも鮮明に思い出せるくあの>BHの姿は、今となってはもう昔のものとなっていました。(くあの>とは、屋根を通して空が見え、抜けた床から草が茂っていた状態)

おおまかな作業自体は、一昨年の屋根の張り替え、昨年の床の張り替えをもってほぼ終了していたわけで、今回は懸念の雨漏りの修復を中心に作業をすすめました。2パーティーぐらいで一泊二日もあれば十分こなせる作業でしたが、OBの方々より「月見の宴」をBHでやりたいとの要望を受けたまわりまして、それなら全員で行ってしまおうとなり、今回の小屋作業の計画を練りました。

連絡不行届きで、昨年同様ボートを渇水期に出さしてしまうなど、不安なスタートをきりましたが、準備面ではいろいろな人達が手伝ってくれたおかげで順調に進みました。

9月21日より入山。昨年のように日をずらし入山することは、今回は一斉下山のため不公平が生じてしまう。都合のあるものだけが翌日Dパーティーとして入山することとし、あとのA、B、Cの3パーティーと一緒に入山した。その中でも特にAパーティーには、後から来る者達のために夜明け(AM4:00)から入山してもらい、草刈りをやってもらった。

正午にはボートが舟着場(テン場から随分と離れていた)に到着し、資材の運搬を始める。BHの横の愁心碑を修復するということで、40kgのセメント3袋をそれぞれザックに入れ、交替で担いだことが印象深い。

小屋の雨漏り修理、その他にとりかかったのは午後2時くらいからであった。屋根のてっぺんのトタン3枚をきれいに剥がし、梁と屋根板

の隙間にボンド状のシーリング材をながしこむ。簡単な作業で3時間くらいですんだ。

翌23日は、セメントに混ぜる砂利をバケツに4、5杯頼まれていたので、朝から拾い始めた。正午に先発隊のOBの方々が到着され、我々も一緒に愁心碑を作る。その後は「月見の宴」に向け準備にかかった。

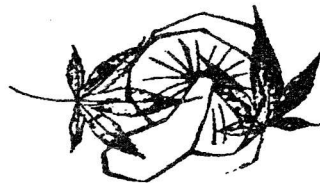
<今後の課題>

おそらく課題と呼べるものは、今回をもって終了したと思われる。次の2回生の判断であるが、来年は部員全員で小屋作業にあたる必要はないと思う。壁を塗り直したり、ドアを替えてみたりなど、上を望めばきりがなく、私個人の意見ではこれで十分と思う。しいて挙げれば、以下の項目ぐらいである。

*今回BHの近くの水場の正確な位置をOBの方に教えていただいた。BHまで水をホース等で引いてくるのが可能なら、やってみるべきかもしれない。

*入口から入って左側の窓の上の板が大きく欠けているので、その修復。

ただ、知ってのとおり、BHの周りは草が多く、湿気が高い。せっかく修復してもこのままだとよくないだろう。私としては、年2、3回の周りの草刈りぐらいはやるべきだと思われる。



夏合宿感想 (現役紹介)



北海道パーティー

牧原 弘明 (3回生 渉外 理 北海道)
メンバーに恵まれ、とても楽しかった。

小林 俊夫 (3回生 装備 工 群馬県)
平和な山行だった。この感動を大好きなあの娘に分けてあげたい。
(コバヤシ君、これでは去年の感想と同じではないか…シンボないノオ。それとも、「娘」が違うんでショカ…。 文責 舟田)

宮本 浩二 (3回生 P審議長 理 富山県)
沢の水の誘惑に負けたボク。楽しい後輩に恵まれた合宿だったかな。

吉原 正敏 (3回生 L審議長 理 石川県)
北海道の風景はすべてが広大だった。

老田 浩章 (2回生 文 石川県)
北海道の山は本州と違い、広大な感じがして最高だった。

川本 幸代 (2回生 教育 岐阜県)
4日間という短い期間だったが、充実した山行でした。

上田 穰 (1回生 工 京都府)
リーダーがむかついたので、おもしろくなかった。(ウソです。ごめんなさい)

小川 利枝 (1回生 経済 石川県)
サブリーダーもいやだった。あとは上と同じ。

北アルプスパーティー

正善 久裕 (3回生 副将・会計 経済 大阪府)
どうしても一つにまとまらず、何度もくじけた。

橋本 征治 (3回生 3M議長 理 三重県)
みんなとても疲れていたが、オレがいたおかげで楽しかったようだ。

浅野 嘉之 (3回生 L会副議長 理 三重県)
1、2年生はとても満足していたし、私自身とてもよい山行ができた。素晴らしい最後の夏合宿でした。

小西 陽介 (2回生 文 茨城県)
今年の夏は冬の山のように真っ白だった。

後藤 秀明 (2回生 文 茨城県)
3日目くらいで下界が恋しくなった。

掛布 真司 (1回生 工 岐阜県)
SLのおかげで、楽しかったはずの山行が…。

中野 貴巳子 (1回生 文 石川県)
もう少し景色があるとよかった。

村井 京子 (1回生 教育 石川県)
いい先輩ばかりでよかった…なんてネ。



南アルプス北部パーティー

友野 克利 (3回生 医療 文 静岡県)

天候に恵まれ、とても気持ちの良い山行ができました。

金吉 史哉 (3回生 BH 理 広島県)

本日は晴天なり、本日も晴天なり。

西馬 由岳 (3回生 BH 工 兵庫県)

平3 (L、SLでないヒラの3回生) で楽しかった。

阪本 京子 (2回生 文 群馬県)

さわやかに山に登ることができて、思い出に残る夏合宿でした。

西田 秀輝 (2回生 文 石川県)

洒落にならないオチをつけてしまったが、すごくいいステキな山行でした。

ミリアム・グリーン (2回生 文 アイルランド)

景色の素晴らしさ、天気ノ良さ、今マデ一番最高ノ山行ダッタ。

加藤 竜将 (1回生 法 三重県)

天気もよく、ヒゲも伸び、鳥やトンボも楽しげだった。

山崎 茂雄 (1回生 経済 群馬県)

3000m級の山に登れてよかった。

南アルプス深南部

パーティー

佐川 貴久 (3回生 主将 文 栃木県)

何事もなく平和に終わってよかった。

宇根 悟史 (3回生 L会議長 工 大阪府)

ヤブがうすく、ある意味で拍子抜けしたけれど、おもしろい山行でした。

高石 拓男 (3回生 トレーナー 経済 新潟)

楽しくてよかった。

三浦 永士 (3回生 P審副議長 法 愛知県)

鹿の平でこの世の極楽を見た。

岩倉 里英子 (2回生 工 富山県)

道がないとはなんと心細い事なのでしょう。

小泉 誠司 (2回生 理 広島県)

なんか甘ったるい山行だった。

黒須 美代子 (1回生 教育 栃木県)

ヤブの合間はさわやかでした。

高岩 伸行 (1回生 理 栃木県)

いい思い出になった。

前川 昌宏 (1回生 工 福井県)

晴れたのでよかったなあ。

行事報告

(95年夏合宿以降)

*雨飾山ワンデイハイク 10/14-10/15

小谷温泉 二雨飾山

L小西 SL西田 小林 吉原 小泉 小川

*95年度小屋作業及び月見の宴 10/23-10/24

CL正善 (4回生3人 3回生12人 2回生6人
1回生6人)

前田顧問 OB36人

*カヌーワンデイハイク 10/28

庄川

L金吉 SL吉原 西田 後藤 黒須



OB会会計報告

(平成 7年 7月 1日～平成 7年11月30日)

会計 23期 鳥越

《 収 入 の 部 》

OB会費納入	486,000
寄付、カンパ等	20,000
預金利息	666
計	506,666

《 支 出 の 部 》

OB会報(やまざと) No.3制作費	121,939
〃 郵送料	110,390
東海ワングル会活動費兼御祝い	30,000
〃 参加費(役員3名分)	76,992
平成7年度小屋作業援助金(明細別紙)	50,000
月見の宴援助金(明細別紙)	69,876
OB・現役(3年)懇親会	142,900
15期横井さん香典	10,000
その他諸雑費	6,353
計	618,450

《 差 引 剰 余 金 》

前回(7.6.30現在)繰越金	2,120,302
収 入 の 部	506,666
支 出 の 部	618,450
差 引 合 計	2,008,518



以 上

事務局より

上記残高中、相当額が今回のBH誌発行補助に支出される予定です。
会費未納の方は、下記郵便振替口座へ納入、ご協力をお願いします。

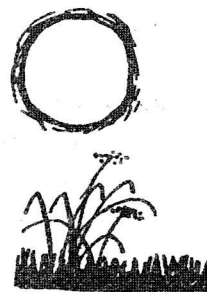
00780-3-14120 金沢大学ワングーフォーゲル部OB会

(別紙)

7年度ベルクハイム修理作業、月見の宴会会計報告

《収入の部》

7年度小屋作業援助金	50,000
月見の宴参加費(35名)	105,000
〃 寄付等	30,000
計	185,000



《支出の部》

月見の宴食費、酒代	116,877
〃 連絡費	15,826
〃 献花代	3,800
ベルクハイム修理費、記念碑材料費	32,870
現役作業費、食費、交通費	40,000
現役慰労費	20,253
その他諸雑費	25,250
計	254,876

《差引不足金》

収入の部	185,000
支出の部	254,876
差引合計	<u>△ 69,876</u>

※差引不足金△69,876円はOB会会計より援助金として支出しました。

以上

事務局より

今回の行事は、月見の宴、慰心碑補修、BH修理を同時に行っており、会計も一括処理を行いました。当日会費は飲食費相当で設定し、他は全OBにもご協力いただいたという解釈で、OB会会計からの支出で補うことにしました。ご了承下さい。

月見の宴では、お酒・おつまみ・金封と、多数の差し入れを頂戴し、心豊かな時間を過ごすことができました。ありがとうございました。

ページ打ちを終え、最後の編集後記を打っていたら、「遅くなりましたが」と中村さんからの電話。近くの親戚のファックスへ流してもらい、原稿を入手できました。

15期同期会の折り、上馬さんに便乗させてもらい、「20期中村さんという人」に原稿を頼んだ話をしました。すると、彼は同じ生物科の後輩であること、一緒にイヌワシの調査などで山へ行ったりしたこと。実は彼からの依頼で四日後に加賀市へ講演に行くことになっていること（ああ、なんだ人脈つながってたんだ。同じ県内にいながら、知らないばかりにもったいな

いことしてるなあ）。そして、これは普通疑問に思うし、原稿には書かれていないので補足すれば（さしつかえがあるとは思えないので）、高校時代から交際していた女性と結婚し、彼女の祖父の窯を継いだこと。いろいろな作品を焼いているが、生物科出身らしく鳥のモチーフ等も多いこと…等を聞きました。

ワンゲルOBは控え目な方ばかりで、自主的に原稿を下さる方は皆無。楠屋先輩みたいに私も耳をダンボにして、書く種のありそうなOBを探していますが…ある日、あなたにも「原稿ちょーだーい」のコールが…。

「陶芸家・中村元風とは ワンゲルの土屋のことです。」

20期 中村 元風

ワンゲル20期土屋正登といえは、近い期の人
は思い出していただけるかもしれません。それが過去の私です。

日本工芸会正会員・九谷焼陶芸家中村元風（
がんふう）というのが現在の私です。結婚して
中村姓になり、陶芸家としての雅号を元風とし
た為に、全く別人のようになってしまいました。

この度、思いもかけず舟田さんより電話があ
り、

「トイップ大賞おめでとうございます。つきま
してはご活躍の様子を書いてもらえませんか」
との御依頼があり、それではまあ、名前がすっ
かり変わっていることの紹介も兼ねて、何か書
いてみようかと思いたった訳です。

さて、トイップ大賞の説明から始めます。ト
イップ大賞というのは、日本青年会議所が将来
を期待できる傑出した若者を表彰するというも
ので、石川県で毎年5人位の人にあげている賞
です。私が傑出しているかどうかは別にして、
「夏子の酒」や「妹よ」を書いた水橋文江さん

らと一緒に今年この賞をいただきました。大変
名誉なことだと思っています。

私には陶芸の仕事をしていく上で、自分の住
んでいる地域と、九谷焼業界があつての仕事だ
という意識があります。それで、地域と業界の
為になる活動として、モレシャン塾（フランソ
ワーズ＝モレシャンが加賀市でアトリエを持つ
ことに協力し、始まった）や、ギャラリー元（
東京大丸百貨店で九谷焼等を紹介する展示ス
ペース）の運営をしてきました。

また、本業の面では、古九谷を今に再現する
という、非常に難しい仕事に挑戦しており、ト
イップ大賞選考委員の中に、その仕事を高く評
価されている方がいらしゃったとのことでした。

それらのことを複合して、たくさんの陶芸家
の方がいらっしゃる中、陶芸家として初めての
受賞となったのだと思います。



次に私の仕事を紹介します。私は陶芸家として、ロクロも回し、上絵付もするという、何から何まで一人でやるというスタイルで仕事をしています。

仕事の内容は大きく二つに分かれています。一つは、古丸谷の写しや古丸谷からヒントを得た、小皿、大皿、酒器、花器など絵付された磁器を造る仕事です。私はこれらの仕事を今丸谷と呼んでいます。丸谷焼はそもそも装飾品を作ることが伝統なのですが、私は「使う」ということも考慮に入れて、飾ってもいいし、使ってもいい、というようなものを造っています。

もう一つの仕事は、「自己表現」といっているのですが、人がどう思うということを考えず、自分の造りたいものを造っているという作品づくりです。

二つの仕事共自分にとっては大切な仕事で、どちらがどうってことはありません。

作品の発表は、日本伝統工芸展と、年に2、3回開く個展が中心です。日本伝統工芸展といっても馴染みのない方も多いと思いますので、説明しますと、文化庁主催の日本で唯一の工芸展で、この展覧会で偉くなると、人間国宝になるといった展覧会です。少々俗っぽい説明ですが、その方がわかりよいかと思います。

仕事の説明をするときりがないので、この辺で止めます。今後私は、全国のデパート等で、個展をする機会が多くなると思います。もし、「中村 元風作陶展」のようなものを見掛けたら、「私」ですので、是非覗いてみて下さい。石川県では、多分来年初めての個展をする事になると思います。

丸谷焼では、金沢美大出身の陶芸家がほとんどの中、「金沢大学出身」で頑張っているもので、是非よろしくお願いします。



中村元風さん



1995[ISHIKAWA]
TOYP大賞

二木大一さん(39) 美川町在住の二木さんは、町を流れる手取川の清浄と川に親しむ活動(手取クリーンカーニバル)の実行委員長として活躍中。平成5年には約4000人の参加者を集め、2トトラック14台分のゴミを回収した。

水橋文美江さん(31) 高松市美松

上京した水橋さんは劇団「まるまる

行進曲」を主宰。その後平成3年には

脚本家としてデビューし、「夏子

の酒」三妹よ」など全国放送の人気下

ラマのシナリオを手掛けている。

金沢 人物往来 交差点 HUMAN CRAMBLE



ZOOM
今週の若者たち
UP!

様々な分野で活躍する
石川の若者たちを表彰

TOYP大賞受賞者 中村元風さん、濱田奈美さん、水橋文美江さん、二木大一さん、米林格崇さん

(社)日本青年会議所石川支部協議会が主催する「1995 ISHIKAWA TOYP大賞」の表彰式が去る9月2日(土)、金沢日空ホテルにて行われた。TOYP(The Outstanding Young Persons)の略とは「傑出した若者たち」の意味。今回も夢とロマンを持った活発な活動により社会に大きな貢献を果たしている石川県出身の若者5名が選出された。ここでは受賞者とその活動内容とともに紹介している。

中村元風さん(40) 丸谷焼陶芸作家で加賀市在住の中村さんはフリードビアの食事を同市で開催するために尽力した。またその際知り合ったフラソワーズ・モレンヤンさん(30)を招いて「モレンヤン熱」を開催した。濱田奈美さん(32) オペラ歌手の濱田さんは「マダム・バタフライ」の蝶々夫人役などをヨーロッパ各地で好演。また石川県内各地での公演活動も行っている。

二木大一さん(39) 美川町在住の

二木さんは、町を流れる手取川の清

浄と川に親しむ活動(手取クリーン

カーニバル)の実行委員長として活

躍中。平成5年には約4000人の

参加者を集め、2トトラック14台分

のゴミを回収した。

水橋文美江さん(31) 高松市美松

上京した水橋さんは劇団「まるまる

行進曲」を主宰。その後平成3年に

は脚本家としてデビューし、「夏子

の酒」三妹よ」など全国放送の人気下

ラマのシナリオを手掛けている。

またしても「いじっかしい」言い訳つきで、ご披露します。この原稿は、中川氏に印刷原稿を送り、他の「配下」の皆様にもその後の一連の連絡事項を指示した後に到着しました。慌てて中川氏に訊ねてみると、印刷機もろもろの都合で数日後にとりかかる予定とのこと。それで掲載に間に合いました。

原稿を読んでびっくり…。そもそも、35周年記念の前の趣意書に同封するOB会名簿作成の折、各期代表に同期名簿の送付をお願いしました。その際の

「同期に山を続けている人はいませんか？」の問いに対し、18期椿川さんからの返事には「田辺がヒマラヤに行っています」との一行が添えられていました。それを今頃思ひだし、

「原稿ちょーだーい」をやったものなのです。トレッキング、プラスの程度の話のように私は思っていました。p 4に「余りに雪や岩といった先鋭的な山行をする人は、かえって山から離れてしまう…」どころか、8000m! いやー、知らないということは、オソロシイ…。

これはもっとあれこれ聞いてみなくちゃと、黒部市民病院へ電話をかけると

「田辺先生は今オベ中です。夜中までかかります。」

そんなら、同期の松林氏へ…。

「また事故かぁ？」

「ううん、これこれしかじか。そんな遠征なら新聞に出ていたはずと思う。調べてみて」

「うーん、北国新聞ならデータベースで直ぐ調べられるけど、富山みたいな地方紙だと倉庫に一部残してあるだけだぞ。もしかして北日本かなあ。ほやけど、どっかの新聞社とか、テレビ局が後援していれば、紙面にはでんぞ。」

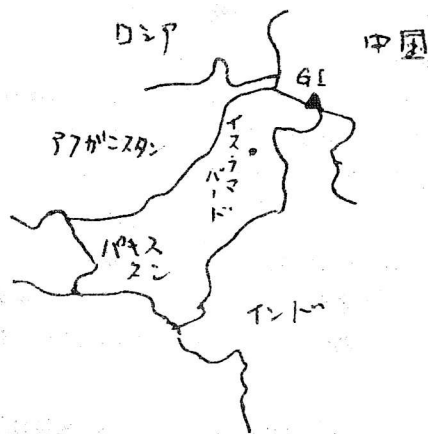
編集長は、お手数をかけることに恐縮する一方で、そんな次元のことで「事実」は消えてしまうんか!? 報道の使命ってなんや! と憤るのでありました(松林氏の落度ではありません)。

結局、北国、富山には出ていなかったそうです。続きは次回のお楽しみに…。

富山岳連 '94

ガッシャーブルムI 峰遠征

18期 田辺 隆一



富山岳連では、'83年ナンガパルバット、'88年ブロードピークに続いて、'94年三つ目の8000m峰に遠征隊を送ることになった。いずれもチベットパキスタン国境の山で、カラコルム山脈の一部である。ブロードピーク同様、世界最大級のバルトロ氷河を遡り、BCに入ることになる。

6月17日、イスラマバード着。日中は47度にもなるが、湿度は高くないので、日本よりは過ごし易い気がする。買い出しやブリーフィングも終え、20日、エアコン付バスで、カラコルムとヒマラヤの玄関口、スカルドへ向かう。途中のカラコルムハイウェイはガードもなく、スリル満点。ここで最後の準備を終え、24日、ジープ7台に隊員13名と隊荷3トンを積み、アスコーレへ向かう。スカルド=アスコーレ間は、以前は徒歩で4日間かかったとのこと、案にはなったのだろうか、日本人的感覚からすれば、道路とは呼べない代物である。

26日、いよいよキャラバン開始。ルートが整備されたとはいえ、午前も早いうちに行動しなければ、そこかしこから氷解け水が湧いてきて、渡渉を余儀無くされる。標高3000mのアスコーレから、5100mのBCまで約100kmのうち、初

めの二日間のみ土の上で、後は凸凹の氷河上を、強烈な日差しと、乾燥と、低酸素に苦しめられながら突き進むこと8日でBCに達する。途中コンコルディアからは、K2、ブロードピーク、etc etc ……。

7月6日以降、次々に、アメリカ、スペイン、ボスニア、イタリア等の隊も入山し、一大テント村が出現した。C1 (5900m) までは、巨大なセラックやクレバスが多数あり、非常に危険で、ヒドンクレバスに転落した隊員もいた。日に日にクレバスが口を開けていくため、ルート変更もしばしば。こんな場所を、外国隊は涼しい夜間に行動している。

C2 (6400m) までは雪原で特に危険はない。C2のすぐ上の稜線は中国国境だ。

いよいよ未踏ルートに取り付き岸壁にルートを伸ばすが、岩が脆く支点がとれず、また、懸垂氷河の崩壊が激しく、未踏ルートにこだわるか、通常ルートに変更して登頂を最優先にするか、の選択を迫られた。

BC撤収は8月15日、あと10日しかない。後から来た外国隊が、通常ルートから続々と登頂を果たしている中、ルートを変更して、C3 (

7400m) より登頂に賭けることになる。

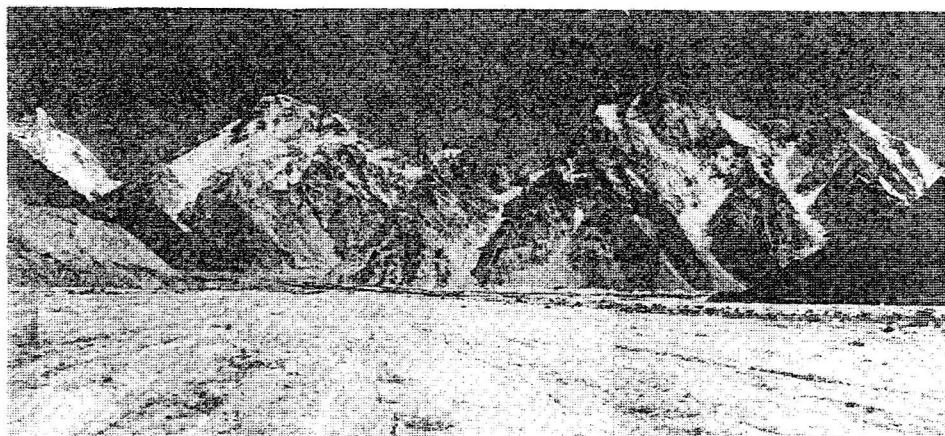
9日C3に3名入るも、猛吹雪のため食料燃料とも欠乏。12日快晴。頂上直下70度の氷壁を乗り越えて3名ともに頂上に立つ。C3に帰るまでに15時間行動。C2からは往復17時間で物資が届けられた。

二日間で上部キャンプを撤収し、15日のみ休養兼梱包。

帰りのキャラバンは通常ルートであるが、出水で途中の籠の渡しが壊れたとの情報があり、ゴンドゴロ峠を通り近道することになった。峠といってもただの鞍部でも5500mあり、吹雪の中、氷河上に行くのは背筋が寒かった。

4日でスカルド着。杏の実がうまい。畑には小麦が実り、2ヶ月の時の流れを感じる。

11年の間をおいてのパキスタンであった。一部の都市は日本などとほとんど変わらないが、やはりスラムも現存し、田舎へ行けば未だ電気のない自給自足の生活である。しかし人々の顔は明るく、日本人が忘れてしまった心をしっかりと持ち続けて生活していた。そして山々は高く、人間なぞ我関せずとばかり聳え立っていた。



左からK2、ブロードピーク、ガッシャブルム

編集後記

「このあいだの会報に書いてあったでしょうが！」

「一節ちゃんのは長うて…読まれへん」

書かなければ伝わらず、書いても読まれず…私はどうすればよいのでしょうか？

もちろんこの非情なK.U.氏は編集長の報復を受け、「読まれへん」かもしれない原稿を書くはめになりました。

いつから無関心は美德の一種になったのか…「老兵は語らず、ただ去り行くのみ」は戦後の急激な変化についていけない者にとって格好のコピーとなりました。しかし、オウムのようなものを蔓延らせる土壌ともなったのではないのでしょうか。

「現役時代」はあるけれど「現役」という人はいない…。うぶな新入生が、自信とニヒルを漂わせた三回生になり、「私もとうとうOBになってしまいました。」と頭をかく姿を何人も見てきました。私が今もワッゲルに魅かれるのは、それが「人」を育てるクラブだからです。

「先達はあらまほしきものなり」と兼好法師も語りました。示すべきは示し、語るべきは語り…それをどう受けるかは本人次第なのであって、先に生まれた者は伝える労を惜しんではいけないと思います。

言葉を使い、文字を使うことで人類は進歩を手に入れたというのに、インターネットで世界とつながるという時に、仕方がないとあきらめ、疎遠を良しとすることが私にはできません。OBにはOBの経験、小遣いから繰り回せるお金があり、現役には、組織と時間があります。お互いの立場なりの得手を生かして交流してみれば…。OBになってからでは影響を受ける余地は少なく、現役時代こそが、情報を生かし、考えられるチャンスではないか？現役時代に一度もOB会と交流したことがない人が、卒業し社会にもまれてワッゲルが一番遠くなった時に、さあこれから親睦しましょうと会報が送りつけられ、年会費を請求されたら…どんな気持ちになってしまうのか。…オソロシイ。

そういいながら、40周年を共催してくれる「筈」の現役達は、まだ金大生にもなっていない。現役（現役時代にいる人）との交流といっても、毎度砂上の楼閣…。

そんな現実と夢をしっかりと見据えて…五年の任期の後半戦に入ります。

(編集長 舟田 節子)

PS 会報の原稿はいつでも募集しています。

OB会報「やまざと」 '95冬号 (4号)

発行日 平成7年12月

発行者 大島 良治

編集責任者 舟田 節子

印刷 中川 晃成

金沢大学ワンダーフォーゲル部OB会

事務局 金沢市橋場町10-49

☎0762-22-9288